

關取千兩幟

近松好田文吉落出二
竹八民平七

竹本三郎兵衛

作者

別れの跡の振狐、くこんぐいの涙あるらん、是へ此邊に住居致す古狐
でござる、爰に有者のいが、いつの頃か、狐を釣初、面白いと思ふてか、釣
程にく、我等が眷屬を釣取て、某をも覗へ共、そつ共油斷致さぬ所で、聊
示^モ餌^エをはみに出ふ様もござらぬ、爰より彼が伯父坊主^{おきわら}、白藏主^{はくざむ}とやが
ござる、此白藏主のやさる事へ、あまさか様ある事をも、彼者が承引致す
所で今日へ白藏主に化^{はな}異見^{けん}を致し釣止^{とま}らせふと思ふて、化たかと存る、

先彼獵師の元へ行はやと思ひい住馴し我古穴を立出でく、足に任せ
て行程又獵師の元に着にけり、急ぐ問、獵師の元又着てござる、誠又彼者
が、犬（わんざう）を飼（かわす）ぬが一つの取得（とくえい）でござる、犬を好（す）て飼（かわす）あらば、中（なか）へ我等ときの
寄付事も叶ふまいくへい、先案内こふ、物もう、案内もう、表に物もふと有、
案内誰（だれ）をあたでござる、主様、白藏主様、愚僧（ぐそう）ておりやる、こあたあら案内
あしひ通りへあされいで、夜中に何と思ふてお出あされました、只今參
つたへ別の事でもあい、ちとそあたに異見（きけん）の玄たい事有て參つたは異
見とござるあらいか様の事成共承へりませふ、聞へそあたへ狐を釣（つ）
の、左様の事の存じませぬ、人ごとに云せらる、よもや偽（うそ）で、お
りやるまい、浮存の上（かみ）、隠しませふ様へござらぬ、成程此間へ釣狐を致
します、夫（のち）心あきとておじやる、狐と云者（いふもの）執心（しつしん）の醜しい物じや、此
後ふつかり止らしませ、何が扱こあたの浮異見（うけん）でござる程に、此後ふつ

つり釣止りまするでござらふ、何處や止らふ。夫あら爰に、狐の執心の恐
ろしい物語が有語て聞そふか、アとても釣止るまいあらいかぬ物かい。
ヤフココリ止りませうお聞しあされませい、夫あら其床几をおく事や、
畏りました、お床几此物語を聞いて後、釣ふつたりとお止せやれや、畏ました。
抑狐の神にてぞおひします、天竺みてハや玄ほのみや、唐土にてハき
さらきの宮、我朝にてハ稻荷五社の大明神とすも、皆是狐也、又鳥羽院
の臣時玉もの前とすて、容顔美麗の美しき上童の有しが、彼を玉もの前
とす子細ハ四角八方其姿を見るよ、裏表あき美しき女也、惚じて玉に
ハ裏表あき物あれバ迎玉もの前とぞ召れける、ア、有時清涼殿にては歌
合せ有し時、ゑいそのごとくある大風吹來り、禁中の灯火一燈も残らず
消ぬ、其時玉もの前が身を光りを出し、玉殿ハナに及ばず、は庭の真砂の
數迄限あく見へひ間帝此光りに當り給ふ、と忽惨懃とあらせ給ふ、貴僧

高僧を請しやされ、いろくひ祈禱きとうへ共更さう其驗じるしあし、爰に安倍の泰成たいせいとナ博士はかせを召れ、占うらなせてほらんずれば、泰成參り念比かんがへに考ナ様是ひ偏ひだりに玉もの前まへが所爲ところへ、根本此女このめハ狐きつね、天竺てんしゆにてハはんぞく太子の塚つかの神、大唐だいとうにてハ幽ゆう王わの后ごはうじと成なて七帝しちたい迄取殺とりそつし、今又日本にっぽんの帝王ていわうを取奉うけいそらんと玉躰ぎよく、近付ちかづかゝる執心しじんの恐ろしき者ものあれば、急すみき調伏てうぶ有あて然ぜんるべしと、頼たよて玄げんゆだんをついてごだんを飮藥師おのまつしの法ほうを行ひ給たまへば、大内おほうちもまたより兼下野國じもつけいこく、ゐすのゐすの、原はらに落おちて行ゆこゝ、あいつうげの者ものあれば、疎はざわとしてハ叶はひじと三浦之助みうらのすけ上總かみつづ之助のすけに仰付あおひそらる、兩助承うけりつて下野國じもつけいこくあすのあすの、原はらに下着げきして、百日ひゃくじの犬追物いぬおとものとぞ聞きへける、百日ひゃくじの犬満まんしげれば、大き成三さんツ尾おの古狐こきつね顯あらわれるを、一の矢やハ三浦之助みうらのすけ、二の矢やハ上總之助かみつづのすけ、ひやう、とつきと射い得とどたりやかうと飛とり、劍つるぎを以もつて彼かれを害いたし帝だいへ此由そじ奏聞さうもんナけれど、君きみの済さい惱のうも忽こゝちに平へい癒ゆ有あ、國くにも納なり太平たいへいの夢ゆめ

代と成、猶も其執心大石と成て、人を取事數度らず、地を走る獸室をかけ
る翅迄地に落かゝる殺生を致す石あれば、追殺生石とハ名付たり、爰々
立翁といへる僧、彼石に向つてかつす、汝元來殺生石とさせきれい方や
う、何れの所々か來り、何れの所々か去と拂子を取て三ツ打、打れて此石
割れしる、猶も人を取ぞかし、かゝる執心の恐しき者あれば、此後釣ふつ
つとお止り有かしと思ひすよ、恐ろしい物語を承へりました、此物語を
聞いて、狐を釣ふ物でござらぬ、此後ふつづりと釣止ませう、夫ハ嬉し
い、夫あら其狐を釣輪わあとやらが有ふ、夫をおすちやれ、お歸りあされ
たら捨ませう、いやといへべ、其道具を見たら、釣たい心もでふ、身共が見
る前でとつと、おすちやれ、畏りまし、是でござる、ハ穢しやく、とつ
と、おすちやれ、捨ましてござる、何じや捨たハ、よふおすちやつたの
ふ、異見けんをやにお聞やらずば、腹が立ふに得心めされて満足致した、奥へ

通り子供こどもも逢ふあれ共、清められてから参らふ、ともかくもあれませいそあたも又またちと寺へおでやれ、何も駆走かうそうかうそうあけれ共、昆布こんぶ、山椒さんしょうよい茶をやそふ、其お茶が何なにでござる、お出やれといひやたれ共、何も駆走かうそうハヤシ、昆布こんぶ、山椒さんしょうをまいて、茶斗さとうやそふ、よふお出されました、お出やれとやたれ共、何も駆走かうそうハヤシ、昆布こんぶに山椒茶斗さんしょうさとうやそふ、茶斗さとう、ライ嬉うれしやく、まんまと異見を致してわあを捨てなげさしてござる、是から何方へ行ふ共、身共みきみが心の儘ごむじや、此様このようあ心面白い時とき、小歌こかぶしで歸かへらふ、所に住すべこそ浮名うきなを立たてのふ、いのやれ、我古塚おきづかへ、じやあら、トワトアト、わわああを捨てなげたかと思おもふたれ、身共みきみが歸かへる道みちのまん中なか、ばりすまして置おつた、善九郎ぜんくろうの聞きぬ者ものじや、誠まことに、人間ひとの狐きつねをペヤコの心こころとやて、物疑ものひひをするとやと聞きたが、きやつきやつへ狐きつねにへおとつたやつじや、ま、いや又またの様ようを事ことがして有あ、若者わかわざ共ともかわをよかよか、つたしらぬ

わあの様^{やう}跡^{あと}を見て置たい物^じやが、何^{どう}やらちいさい真^ま黒^{くろ}あ物^ぐが有^が、
臂^へめ、其^そちいさい形^{かたち}で、よふ身共^{みどり}がけんぞくを釣^つ取^とたあ、夫^おがよい^よか、是^が
よい^よか、覺^おへたか、く、よい^よい匂^{にお}ひかあく、わあにかゝつたこそ道理^{ぢのう}あ
れ、上々^{うわ}の若鼠^{わづか}の油^{あぶら}上^う、是^ががく^{かく}はずにおかれうか、飛^とかゝつて一口にくは
ふ、喰^くたいあく、^テ誠に、眼前若者共^{みどり}がかゝつたを知^しつ、身共^{みどり}がわあに
かゝつて成^なま^い道^ぢをかへて歸^からふ、よい^よい匂^{にお}ひかあ、此匂^{にお}ひをかいで
ハ中々^{なかなか}歸^かられぬ、そうじや餌斗^{あひと}むしつてくふに、くれぬといふ事有^あ
か、飛^とかゝつて一口にくひたいあく、何^{どう}をいふても此^こ身重^{おも}い形^{かたち}で、わあ
にかゝつて成^なま^い、よい^よくたつた今此化^{まけ}た衣^き装^うをぬいで來^くて、一口
ヌする程^{ほど}に、そこをのいたら比^ひ興^{げき}者^じで有^あふぞゑい、くわい、く、く、く、
中入侍兼樂屋^{がくや}よハ大坂屋^{せんざい}の全盛^{ぜんせい}錦木太夫^{かずら}禿^{かぶ}共^あふく引舟^{ひきふね}押^おぬぐふ、汗^{あせ}
ハ流れて泉派^{じゆばい}の、後の出端^はの衣^き装^うをちやつと、おさやくもう狂言^{きやうげん}所^じ

やあいと禮三が胸くら引すへて、お前様へ／＼よふも／＼あんを惡性
あされますあ、コレ何いふのじやそいの、新住の京が事か、さしてもな
い事を悟氣ひゆるりと仕やいの、イエ／＼あんのそんあ事いや致ませぬ、京
大坂での色事あらまだしも、遠い近江の彦根とやら、しかも屋しきの女
中様か、お前に逢してくれい迎あちら座敷に待て居る、わたしひちらぬ
ふりで袖之丞に問じたれば、禮三様に國で深ふ云かへしたとあつかも
じい云様／＼百合、ア／＼あの通り、お前の惡性に違ひ／＼あい、何と覺がござ
りませうがあ、有でもあしもあし、彦根へ親共から用を聞家
去年お國へいた時に、三島彌太夫といふ人の娘、お才といふのについち
よつと、其ちよつとが癖の悪いと、口舌の半狂言半若旦那／＼をうでござ
ります、肝心の所間が抜てらりに成た、太夫様こりやア何事、コレ善九郎
様、かうじやわいあと、さくや、我折、初ハ旦那が釣狐じやあい釣娘、

女子を化す男狐、おれも狐の面目あい、煦こんへいでござりませう、
口合所かいあ、わたしに惜氣仕へせぬがアセふせうと思召、ハセふとい
ふていいあして仕廻ふ分の事、したかおれ又逢ずべいぬまい、ちよつと逢
てよいかけんに欺していあそふ善九郎爰へよんでこい、ヨリヤく太夫が事
へ隠すのじやそ、ナツトそこらへすあさせんぞうあと勝手に走入、ついに來
あれぬ難波瀬田舎育のぽつとりも堅い武家の育がら、若黨らしげ付
添て、しどやかみ座みつけ、是ハクお才殿、ア禮三様、お久しうござ
ります、何として爰へ、ア私ひと、様に勘當受てさんじました、お前と
ふと云かれした、様子へしらず彌太夫様、丹波の家中津田兩助様とやら
へ嫁入さす約束したと、聞てハつと癌が上り、かゝ様に打明て、瀬平、成
程左様とからあるたへお前も添ねば死る心と、アて云号の兩助様へ立
す、母御様御合点で國を欠落再びやしきへ歸らつしやると手打に逢娘

御いやでもおふでもお前の奥様お手渡し致いたら拙者へ早國へ歸りたいと様子段々聞度に禮三が悔り太夫がしゆら腹立顔をお才があがめ、やああたへをあた様^{イマ}是へおれが伯母貴じや、^モても扱もお若いふば様でござんす、^{アリ}あの様に見へれど年へ四十六元服した子が二人有是へしたり、やおばご様、お聞遊べず通りあれど、今から諸事をお引廻しといひかけられて錦木もふせうぐに、^{アリ}よふこそ禮三をかへいがつてやりあはます、わたしひばゝの事あれど、増花のお前様お樂しみあはませとびんとするのをしづめる禮三、あやくり廻す狂言師も、あとにこまりし最中へ、禮三くちと逢ふと立出る、藏屋敷一原九平太、禮三へちやくと、瀬平殿、おオハ少の間隣^{となり}の西照庵の庭見せて来て下され太夫もあちらへ、錦木の爰^{イマ}おけ^{イマ}やけふ^{ハシマ}の禮三が揚^{ハサウ}た太夫廓^{カシマ}の借かりの格別、お前の慰^{なぐさみ}に成ませぬ、構^{ハシマ}はずといきやくと、追やる跡にむ。

つと顔町人と武士とが買論かひろんしても濟ぬ事、先達て錦木へ親方左右門方へ手附金渡し置たれば、げふあすみに身受して身共が女房、あんほげんきべつても部屋住の禮三、稽しき立だて叶はぬ事と、惡口明て次の間から、手代の善九郎よしじゅうろうお侍様おしやうさまこつちも二百兩ひゃくりょうといふ手附くつわへ渡した使つかひ拙者、若旦那わかよなあいがれて、立ませぬ、けふ中なか身受して見せたいあ、あらぬ事じごと、七百兩しちひゃくりょうの金があくて、太夫が身受へあらぬかい、ふきや飛様ひんじやうあ身上じんじやうで、何なんとして、と、當あこすられて若氣の禮三、無念むねんあがらも有合あわさぬ兼て始終しじゆうを一間いちまの中、金子かなこに用もち立たてアそふ、禮三殿らいさんてんと呼かけてしづく出る其物そのもの駄たぐひ、お前まへ江州こうしゆの村岡團右門様むらおかだんしゆうもんさま、に用もちに付て登のいた様子さまあれで承うけつたがお手前まへこりや立たてまい、只今太夫を身受めされ、今其方そのほう又有合あわさぬ金子、團右門がかしナかしナど、家來けらに持せし狹箱はざばこ取り出す五百兩ごひゃくりょう、そんあら其金おかし下おさるか、念ねんの爲假證文かうじゆもん添そなへい、

太夫主ハこつちの物深き恵の硯箱墨ころぐと本判に證文認め差出
せハ、^同九平太様、^{ヨレ}こちの旦那ハ五百兩や七百兩ハ、くつしやみをする
度に、ぶつぶつとふきでる、^{ドヤ}太夫主の身請金親方へ渡してこふかと、金
を財布^{ざいふ}ひけらかし、廊^{ろう}をさして行跡ハ、九平太ハぐつ共いはず、禮三ハ
氣味よく、^同部屋住の勢ひほらうじたか、お氣^きはさへられあ算用^{さんよう}の知
て有^ハ知行^{ハシナガ}で太夫あざハ受出されぬ^ナか侍^{さむ}と當返す、折から中間かつ
すくべい、^同團衛門様へお屋敷より急^きの御狀^{ごじょう}を差出す、封^ふ押切^{おさな}て讀終り、氣
の毒^{どく}ある事が有^ハ、^ニ禮三今^なの金子返してくろやれ、^ミたつた今^なお借^あされ
た其金を返せと^ハ、^ヤありや殿の渋用金^{しうよ}只今^なの難義^{なんぎ}を見て暫くの間に
合せた武士の情、今相役より金子急入用と^ハ越たれば、延引^{えんいん}する^ト身共
ば切腹^{せきぱ}、背中^{なか}に腹^{はら}返してたもれさ^ジやと^ヤてくつわの方へ遣^はした
金今戻^{さば}せと^ハ余りに無^む肺^{はい}、^ヤ身の無^む肺^{はい}いへぬぞよ、此證文^{しじぶん}又何時成共^{へん}返

辨と云ふたへ偽りかゝりや聞へた、かり證文を反古ほことして、殿の金子を
横取じやあゞや一何の左様あやかすもふ此上このうの藏屋敷へ引立
て、相役の手前垢あらかをぬく、よつゝやつと扇で丁々九平太も、盜ひろいた其
金で、受出し自慢置上れと、二人が足下こげ蹴飛けし、さうせうと引立行ゆく
習じゅくと、聲をかけて立出るい、禮三が親種久禪門じゅうぜんもん、親父様おやじさま、いつの間にとい
へと見向むかし團右衛門が前に手をつき、悴へうがぶ調法てうほう、此頭かしらにめんせられ、何事
もば了簡れうけんと、久三に持す千兩箱蓋よつぱうばくあわせ追取おとして五百兩、返進へんしんと差置ばち、叮嚀ていねい
の仕方しおう、かうあうて叶はぬ筈はず淨久きよひさも堅固けんごで重疊てうぢやく、金子きんし相違さうりあい上の急
の御用、罷歸はりきるを狹箱はさまに取納おさめ、そあお侍おさらべと樂うれに默禮まつれい目遣めうづけひよ、様
子有顏九平太とうなづかも隣となり、座敷へ立て行ゆく心かゝりに窺うかがふ錦木きんぼお才おさいも歸かへる小庭
先、聞共しらず親淨久きよひさ、禮三、此親が年々持溜かさだらた身上じんじやう金銀きんぎんへ親の身の油
其油そのあぶらを始抹はじつぶする事をしらぬ、終に金銀きんぎんの冥加みょうかす盡つくる、金かなの町人の寶たから

物、芝居の狂言でも、三種の神器とやらいふ寶物の事ばかりで、一日屋中があたふたする、其太切あ寶物を、色狂ひよ遣ひはたすたわけ者、けふも町の參會に西照庵へいたれば、東座敷の襖に書て有た落書、コレ是見いと取出す襖のまぐり相合かさに、^銅大坂屋錦木、鶴屋の禮三、是見た時の町の衆の手前、あんまり腹が立て引まくつて戻つた、まだ其傍に、誰やかや書て有た、ア何とやら、岸本屋ふゑんとして、其傍又、相入（そな）い醫者殿（いぬしやうどん）にて、慶子と書いて有たわい、コリヤ子供はかせぬ手合、子供の口の端に迄かかる様ある事をして鶴屋の名跡が立られふか、勘當じや、立て行と父の腹立、身にこたへ思ひずしらず錦木を、科人（くじん）の私とお戈も俱よまろび出泣て、詫する斗あり、きよろく眼（まなこ）よ善九郎、禮三様（れいさんさま）、只今くつわへ持ていて、今的小判を明て見たれば、コレ此通の戎様（えいじょう）、こりやアぞふでござります、ア何じや匱金じや、アめんよふあ、近江の屋敷で、村岡園右衛門といふ知行取

が贋金を遣へふ様のあいと、親子の不審、お才が不審アノ、村岡團右衛門が爰へ來たかへ、チイニ、イヤ其團右衛門のわたしよ狀を付て、ども様へ貰かけ、聞入るいを意趣に持、闇討にせうとの工が顯はれ、則私が勘當受た其日一所に團右衛門もお國を追放アラサ、そんあらきやつれお拂者ハラシか、サイ其跡で殿様の備前長光のお刀紛失、是を大方團右衛門が所爲スリヤ、今之金も騙られたが、儕此儘で置ふかと、かけ出す禮三が向ふタカヒ、若旦那お待あされと、名乗ハガキ、高き、岩川次郎吉、池田の名物角前髪カブト、私ハシモト角力の寄初で、浮瀬からたつた今、聞た所が、常脉ツネマツの騙カサギと違ふて、根の有仕事、つい詮義ゼンギへ成ますまいが差當つて、お前の身の上ハシモト、隠居様聞へませぬ、天アメも地アメにも、たつた一人のふ子じやあいか、世界に金遣ふ者があけりや、金設セツる者もあい、金銀へ廻り物、色狂ひした辯勘當ハシモトとい、余り胴欲カミヨクでござります、といふたらお氣にさへらふけれど、土地の者でもあいよ、をうした事かきつい湯最負ヒルヒ、お前の

御恩忘れぬから、大事の若旦那、此くらゐの事で勘當とへ、ちつとむ前老
耄かと思ひます。わしをひいきして下さる氣あり、一番此詫言へ聞て下
んせぬ隱居様と、大きあ形で物言の、あざあい所が關取あり、淨久手を打
次郎よういふてたもつた、常へ追蹤しても、かういふ場所に成と踏込で
詫言する者へ手代もあい、過分を、が此勘當へをふも赦されぬ、といふ
子細の此女中、済用承る近江の屋敷の物頭、三浦彌太夫殿の息女、丹波の
家中津田兩助殿へ嫁入する筈の人と、結び合た禮三が惡縁、かう欠落して
來たれべ、國へあせば直々手打と、いふてお出入のやしきの娘御、ふ義
合点でおれが子の禮三に添しては家中へふも顔が出されぬ、かうい
ふ事のしらいで、息子が夜泊日泊、ハ新町の太夫故いつそ身請してやつ
たらけつくしまりが出来るであろ、聞た様子が、此お山も眞實禮三をか
わいがつてくれるぜ、高が千兩迄の事、給銀の高い乳母置たと思ふて

身受の宛まことより持て來た、隠居金の千兩、まだ五百兩残て有是で濟あら金立て、女房めのわらわにあと、妾わらわにあと、他人の事ひとのことへおりやかまひねど、棺桶くわんとうへ片足踏込で、究竟くつき、駄だを久離切きりねばあらぬとい、思へば悪い入前いりまへと、十徳の杓顔くわいがほにあて、泣倒なぶれたる親心おやこごころ、禮三れいさんも不孝ふこうの悔泣くわいじき、女郎めのわらわも俱ともに、有がた涙なみだ、善九郎ぜんくろうがけらく笑ひ、結構くわうある親旦那おやじなの御了おれい、そんあら其金、錦木きんぼが身みの代しろたつた今親方おやぢへ私持わたくして參まいじましよ、こりやそちそちに頼たのぬ、此使このつかいへ岩川いわがわ、最初さいじょから手附てつき打た使たたかひ、私わたくしア夫めじやによつて猶さうやられぬ、善九郎隙ぜんくろうのあいだをいたゞミイ悔くわいりすあ、覺おぼの有事ありこと、よふ禮三れいさんをたわけ者たわけものに仕上あつしよたあ、末々すゑすゑ番頭ばんとう脇わきにもしてやらふと思おもひの外ほかの不忠者ふちゆうしゃ、引負ひひ万事書立ぜんじよしりつて、お上おのうへ願ねがへば首くびのあいやつ、隙あいだ出すを有あかたいと、出てうせおらふときめ付つける、白藏しらざか主ぬしの眞まことに、尾おの出だた大和やまとの善九郎狐きつね書かくけすごとく逃失とうしつける、傍わきの財布ざいふに岩川いわがわが、金子かなこしつかり受取うとりました、禮三様れいさんよう錦木様きんぼよう、お二人の身みの上うへ、次郎吉じらうきちが

命にかけて、じやがお才様とやらも禮三様に女夫の約束、男一人、女中二人、一つよたべねて世話も成まい、^{ハチ}とふせうと行當る、次の座敷の中から取て、其女中預りましよ、そふいふへど、こから女中の聲じやが、此の子と近付のむ人か、^ミ近付で、あいけれど、岩川様の預にくい女中様、千羽川の吉兵衛が女房、よつが預つて歸りたい、誠に三島彌太夫様、大坂の藏やしきふ勤の時、お目かけられた吉兵衛殿、其彌太夫様の娘、^セ世話せねばあらぬお方、氏神様へ參つた次手、立寄た此惠海庵、幸の所へ來合せたも、明神様のお引合せ、お才様の身の上、どうぞいたしに世話さして下さんせ、頼ますると差當る、難義を救ひ投かけて、頼へ天満千羽川隠れ内義の手取へ、^{ヤレ}嬉しや、よい買入が出來たぞ、吉兵衛殿も預れば慥く、そしてまあ病氣のよこんすか、此間へ大分よござんす、そりや、嬉しいあの人が出やしやれぬと、へしやもふ片腕もがれた様でなんにせいも

と、早ふ本復しられます様と神々を祈て居やんす。也もふこちの人もお
前の深切、かけあがら悦んで、とふぞ秋の角力より岩川を取たいと、力で斗
居られますと、片屋かれれど、からぬ付合、岩川ひいきの禮三郎（通）、おれが
嫁の千羽川よ、世話頼のへ口惜い（コソヤキ）、勘當の身に成て相撲取のひいき
所か、情が大のひいきを受ねば、立ぬ様に成たれい、頼にやあらぬ二人の
衆、今迄の様に岩川、くと澤山にいふ事あらぬぞ、是もいらぬ世話、何
事も皆後生ばだし、あんまみだく、珠數に涙をくり交（モモシ）て、玄波く歸る
爺親に、二人へ嫁共舅共心斗の暇乞、只伏拜む、親子の別れ引違へていつ
こかり、くつわや左衛門（通）、幸よい所、錦木太夫が身受金、と五百兩と投出
せば、うなづいたり、受取の一札、さらくくと書認め、差出せば、岩川が押ひら
き見て不審顔、五百兩受取残つて二百兩とへ何のこつちや、太夫の身
の代へ七百兩まだ二百兩足ませぬ、そりや手附に二百兩善九郎が持

ていた筈、けもあい事へ、慥あ鶴屋の禮三様、其お顔が手附じやと思ふて、二百両が一両も取た覺へござりませぬ。今聞きやむ勘當をやら、跡金の済迄ハ錦木ハ連て歸りますと、手を取ば引はるしげふ一日ハ揚の女郎指モさゝす事あらぬ、あすの朝迎ムおこした、跡金ハ此岩川が呑込である、若旦那、是も善九郎めが仕事、思ひ廻せばそいつもこいつも皆ぐるを見へる、サ取分憎いハ九平太め、岩川頼む最前の仕返し、ぶつてくふち殺してたも、サくよごんず、ヨレくつわや殿、こる様いにしる、隣座敷の九平太様を、爰へ呼で貰ま志よ、志たがわしが顔ハ出しにし、此仕返へお前にさす、こへいことハ何ヌもあい、岩川かひへてある、とこたつのやぐら取てのけ蒲團すつぱり關取の、財を直に櫻あり、何で、危ふ成た時、こたつの傍へ連てお出といへバ呑込禮三郎、皆邪广にある隠れたく、是からおれが荒事、お目にかけんと志こ踏志め、待間程あく出來

る九平太、身に逢たいといふゝ誰^{タマ}や^{シヤ}おれでござんす、何じやニオめが
何の用じやぐつと弓の有のじや、太義あがら一寸^{一寸}こたつ際^際逸出^{逸出}て貰^貰ま
ちよ、^ミ志^シやらあ蚊^{アカ}とんぼめ、何あと早くいふて仕舞^{仕舞}と、こたつにそつか
と^サ志^シてやつた別の用でもあい、最前^{最前}へりやどふしてぶつた、其仕返し
よぶちすへるのじや、^ハ^ハ^ハうぬがさまで身共^{身共}を^を素町人め推參至極^{至極}
推參呼^ハりせまい、今迄こそあれ、勘當受たら破^{やぶれ}かぶれ、屋敷^{屋敷}でも、侍でも
何でも十九文じやぞ^{シヤ}、慮外^{慮外}あと抜かくる、鑓^{こじり}をぐつと後から抜ぬひと
うじやどうろ付中、胸ぐら^{つぶら}掻禮^{かづけ}三郎、ちよこざいすあと突放せ^{突放}せば、鑓^{こじり}返し
よ、真倒^{まつまわ}もふ了簡^{れうせん}がと、掻付、足首取て志^シめ上れ^バ、^ハうぬ何くらふてう
せおつたやらつがもあい力に成た^チ、こたへたかと又そつさり、そんば
う返り山がら投命から^ド、^{からだ}體のす、掃箒^{はきほう}のむね打びつ志^シやく、打伏
られて興^{アガ}さめ顔^顔うぬ武士をひぞいめに合したぞよ、此返報^{へんぽう}の仕様^{仕様}が有

待ておらふと巨燐の傍尻目^{あたごしり}みかけて、逃歸る出来たく、禮三郎、強ふ見
へたく、^イもふ巨燐の櫓^{やぐら}がよふきいた、玄たが待ておれとぬかした詞
が氣味が悪い^{こづ}何を忘ませう、大方道に待ぶせ、あつちから玄^{さな}かける喧^{けん}
嘩^かせふ事があい、何十人でも懲切^ごみする分、わたしに付てござりませど
鯉口^{こじらぐち}くつろげ立出るを、およつが呼留^{きり}岩川様御無心が有、お才様をお供
するハこちの人、吉兵衛殿に成りかゝつて預る私女でも男の名代^{めうだい}お前の
其魂^{たまし}を、わたしに借^かて下さんせ、^イ是^サアお前の方^よ入脇指^{いりわき}若夫^{わざ}が用^ひ
立た時^ひ、お前^ハ解死人^{けし}、錦木様^{ぎん}や禮三様^{らい}の跡^{あと}のお世話^{せわ}ハ誰かするへ、誠
にお前バつかり目充^{まこと}早ふ達者^{たつしや}に成たいと、養生^{ようせい}する吉兵衛殿、お前に
若もの事が有たらこちの人も病が重る、大事の命爰で捨^する所^{ところ}じや有^あま
い、末々お二人見届^{みと}る心のかために其魂^{たまし}此吉兵衛^{この}か、預りま玄^{さな}よ、誤り
やんした、吉兵衛殿に岩川が魂^{たま}つかと預ます、忝いよふ聞届^{きと}て下さ

んじた。いよくかへらぬ二人が魂見届た禮三が證人西のむ才東の錦木、御無事でやいのと本妻妾池田の關取難波の名取勝負の秋の相撲迄おさらばさらべと「別れ行

第二

芝居の南米市へ北相撲と能の常舞臺、堀江くと國くへ鳴闘たる岩川が角力の内へ夫婦連爰に堀江の仮住居、見せゝ初日の銚物半紙、毛氈たばこぼん羽織脇指取まへし、酒の杉バヘ米俵よその軒端をかり初も賑々敷ぞ見へにける、扱積たの見事何ぢや羽織脇指米も有ゑらいはり込じやの、いや又二三年こつちの角力にめつたに負た事のあい岩川、したが今度の角力に、千羽川が病氣故はづむまいと思ふたが思ひの外きついはづみ、シヤ其等勧進元の顔のよいのに江戸方九州方殘らず登、岩川といふひいきの強い力の強い、あんあ男を持者の顔か見たいと表か

ら内を覗て高々と夫の噂女房おとへ出合頭に開嬉しさ顔に少々紅搾梗の前歯の細繩のれん上てによつこり北野やの七兵衛でござります是へく島の内の七兵衛様よふお出さく爰へに打通り扱まあきついはづみ様千羽川が出ぬ故みどふ有ふと思ふたが近年の大入げふへ大方爰の關取が取しやるで有ふと思ふて見物にきた厚あがらちよつと悦びに参りましたが關取にもふいてござりましたか、けふへ叶へぬ用事に付つい近所迄参られましたがもふ戻つていござんせう、アはんにいつぞやひいかぬお世話で練物を纏りと見物致しまして添ふござります、いつでも島の内の祭へ俄が多ふて賑やかある事、私等へ在所者故物見だけいとゑてへこちのに志かれます、イヤセこちらの方も門がざへつくばつかりで奉公人がいとかねば肝心の商がすくあい、イカういふ中におそあつたらはいられまい關取へよい様に頼まますと座を立上

れべ、せへし、いまわは緩りとお茶へと遅いとよい場がござりませぬと挨拶そくへ歸りける、町中のひいきに肩も岩川が、鉄が嶽、陀多右衛門と打連歸る我家の内、こちの人戻らしやんしたか、陀多右衛門様もよふお出、初日からまだお目よかゝりませぬが、きつい大入でおめでたふござります、イそりや樂でごんす、見物の足が早さに、そろく行ふと出かけた道で、岩川に逢たによつて夫でちよつと寄りました、夫へよくよふこそお出したがまた漸と今の先櫓太鼓を打出しました、緩りとお茶成共と、ゑゑやくに汲出する端香る、心の花香どあいそ有、二女房共、留主の内へけふの角力割二持ててあんだか、イエ、また何にを持てへば、二場の明ぬ、今迄知ぬ、何ぞもめてても有かいの陀多右衛門二おれも初日にせん寄角力取たによつて、何でもけふと思ふてゐるがだれと合すぞ、相人によつてへこんたんも工夫二見て見にやあらぬ、いつそ行て聞てこふ

かい、まあよござんすい、其内に持てこふ、幸貰た着も有、主と一所、飯上つて行しやんせ、^ド掠らふとゆふだすき、かけまく神にあらね共、ぼさつ廻りの女房へ、勝手へ立て入にけり、^開岩川様お宿にござりますが、新町の大坂屋から参りました、左右衛門申ます、錦木太夫が身受の跡金けふ中、遣はされませぬと、こちらに身受の客衆がござります故、其方へ相談致します、か前のお顔を立ましてけふ中へ待ます、わすに成たらこちらへ太夫をやります程に、其時ぬしむぢのあい様よ、念を入いとやされましたと、云捨使ハ立歸れバ、^開其身受外へさして、岩川が立物かと、かけ出すを、^開岩川、其身受の譯も其客も、此鉄が嶽が知てゐる程に、^ア行す共よいへいやい、すとや、其身受の相談を、われがよう知てゐるか、其身受の客といふハ、^ア外でも、あいわれじや、此鉄が嶽陀多右衛門じや程に、^アそふ思て居いやいと、俄にこつきも節くれ立頬髭撫てのさばり

類、聞た、こどや九平太が腰じやあ、尤わが爲に大事にかけにやあ
らぬ人じやが爰をよふ聞分てくれ、あの錦木太夫へ、おれが親方の禮三
殿といきづう深い中じや、其錦木故、親の勘當迄受られた事、こりやいれ
いでも知てゐる事、そちらへまあ取てほつて、五百兩といふ金迄渡し、跡
金の二百兩才覺する其内に、太夫殿を外の手へ渡して、をふも岩川が
顔が立ぬ、わがみが中へはいつたこそ幸、どうぞそつちの身受を、じやみ
る様云廻してたるものまいか、鐵が嶽ニシ頼む、くと詞をさげ、事を分た
る言を、鼻であしらふ惡者作り、此身受へをふせうとかうせふとおれ
が儘じや、わのが頼様にしてやろといふたら、勝手へよからふがいやじ
や、わりや惠海庵で九平太様をひきいめに合したばあ、つよいこづち
や、其仕返しを頼れてゐる此鐵ヶ嶽、あんだらくさい事いふあい、すり
や其時の事が根葉に成て、夫故身受の邪广じやう ひろするのか、邪广じやう ひろするとい

のこつちや、錦木が身受へ金づくじやぞよ、僅二百両斗の跡金を園子の
咽に詰つた様に、きつちかゝとほへ頬かゝくとい違ふ、七百両といふ金
をがゝりに出して身受をするのじや、成程尤じやとかくめい／＼親方
を大事え思ふからおこる事じや、何とかうしてたまらぬか、おれを九平
太様へ連ていて、ああたの胸の晴る様に、ぶたし成と踏成とさして、身受
れこつちへさしてたゞ、わがみのいやる通金づくの事あれ、げふ中に
跡金さへ出來れば、頼事も何もあけれど、ちつと急に出來にくく、尤在
所へいふてやつたら、工面の出來る事もあらふが、親共の耳へ入ともあ
い、夫でわがみを頼のじや、又身受仕やつてからが、逆も太夫が九平太様
の女房よやあらぬ、すりや畢竟がついへといふ物じや、だまれやい、太夫
が隨へふが隨ふまいが、夫にや構へぬ、九平太様にハ金がたんと有によ
つて、其金でわいらが頬をはり廻すのじや、ヤン金で頬をはらず共、此岩川

をせふありと腹のいる様にして、身受けこつちへさしてたゞ、一生の
頼じや恩おんよりもきよヨ、手を下る、鉄が嶽だけと、頭かしらを疊たまみにすり付て、頼心ぞせつ
あけれム^洞、そんあら何か、踏ふれてもぶたれても云分うぶあいといふのか、イモ聞
分わてさへたもれば、譬たとへ此身このみをふ成なづくても、ヨリヤ相談あうだんが面白いわい九平太様
の名代マダに、ちよつとかうせうかいと、立蹴たてげにをふと踏飛ふきし、何なにじや、何なにび
とくするのじや、わりやたつた今、云分うぶあいといふたぞよ、但ただし云分うぶが有
のか、何なにの云分うぶが有物うもので、マダくそう成なづくと心任せこころゆきに、其筈そはじや惠海庵えいかいあんで
の意趣返じきかえし、わりや九平太様くわひょうたいようをかうくらへしたか、イマかう踏ふだかと弱よほみ
を付つ込こ尼病あくびょうの髪かみも頭かしらも引ひしやあぐり、さいあむ折ほりから表あらわへいきせき、イ
今日の相撲割あいづけでござります、もふ追付おづけ土俵どひょう入いじや程ほどに、早はやふお出であされ
ませと、書付しょつけほり込こ立たて歸かへれば、陀多右衛門押披ひらき、何なにじや、鉄が嶽だけと岩川いわがわす
ちや、けふの岩川いわがわと鉄が嶽だけ見みい、あれとわれとが相撲あいづけじやとやい、時

も時折も折わがみとおれが立合といふも氣味合ふ事じやあのといふも心に一思案しわんされど池田の岩川といひれては國々へ名の通つた者、又おれも大名のお拘殊に大坂かかへにてあれど此相撲しくじるがさいで扶持離れじやすりやは是二人あがら大事の相撲、九平太様の名代に惠海庵の仕返し玄たれど此算用さんようの濟すみで有、又錦木が身受の事おれ次第、此鉄が嶽心次第玄や水心有バ魚心有うを頼事も頼まれる事まあけふの相撲仕廻たたかへふてから其上の事にせうわい、われも隨分神佛しんぶつを叩たたき廻して、おれに勝様まさぢやみせい、玄たがかいや、おれと取たら骨身ほねが碎くだて重おもて土俵踏事ひあらぬぞよ、ぞふぞ頭取衆かしゆを頼んで、ふりかへて貰もらふて成なと取ぬ方が勝ちやある、夫共に見て見よふと思ふあら、魚心有水心有、岩川土俵で逢ふと強い詞のそこやらにあむあ鉄棒引ひする雪踏せつたぐらつかせてぞ出て行跡に岩川諸手いろてを組思案あんにくれて居たりしが、段々日切の切た跡

金、親方が催促するも九平太が皆仕業とかく鉄が嶽を抱込んであつちの身受を延して貰ふる外へあいといふても一筋繩でいいかぬやつ抱込仕様に、太夫が身受へおれ次第魚心有バ、水心有ミ、ことや今日の相撲を、ふつてやらざ成まいわいの、ソレあれどおれどが立合ふこそ幸、美しう振てやり、あいつに勝を譲て置て、其上でのつ引きせず、頼が近道上分別、どれいへ名取の鉄が嶽ぞふこんたん志て成共、投殺さにやあらぬ相撲いへり、一生懸命の大事の相撲を金故に、ふつてやる岩川が、心の内にせつあさきたあさ摩利支天よも見放され、相撲冥加よつきたのかと思ひ廻せば廻す程空恐ろしさ口おしさ、思はず拳を握り詰身をふるひして男泣、始終立聞女房が涙隠して、こちらの人としたことが、さつきにから飯持へて待て居るの、爰で上るか奥へすよふかと、何氣あければそしらぬ顔、食あら喰たふあい、角力から呼に來た、ド行てかうと立上

れべ、そんあらもふ行しやんすか。岩川殿、^シ髪がきつう亂けて有ぞへ人中へ見ぐるし、^シ結て上ふと取出す櫛箱^{イマ}、^カ結てゐたら隙が入つ。つい撫^{なで}付ておいてたも、^チお前もこんあ髪玄て、行玄やんした事へあいが、いつその事何もかも、^シふて聞して下さんせぬか。^ヤいへどり何を、^ナお前の心のさそれもつれ髪、撫付ておこみ、いつそさつぱり、いへ玄やんせぬかといふ事いあ。^タいふまいく、何ぼわしよいへといやつても高が女の手業^{わざ}いふたら大方かくれが出よふつい撫付ておいてたもと、傍に直れば女房も、おしてひしのぬもつれ髪、髪のはつれを撫付る櫛の背より夫の胸^{うぶ}寫して見た。鏡立^{カミタ}、^サよいか見さ玄やんせと、向ふ鏡のふた取て、寫せば寫る顔と顔^タ、^シ岩川殿、色も青さめ、そして目の内もうるんで、^シふやら氣色の悪そふる顔付、もふけふの相撲へ、^{ヒダリ}断いふて行玄やんすあ、何をあんだらつくすぞい、いつれとも有今日の相撲^ハ、鐵が嶽と此岩川、初

日の出ぬ先から町中が、待て居る公の出合、何でも鐵が嶽を、土俵の砂へ
埋にや置ぬ、そりやうそじや今日の相撲ハ鐵が嶽又ふつてやるお前
の心といふ口おさへて、聲が高い、さつきみからの様子残らず、一問
で聞いておりました、僅か金に手詰つて、難儀さしやんすがわしや悲しい
いつぞ此譯親父様に、たわけめ、それいふ程ありや此様よ、人に擲れ踏れ
ハせぬ、昔賢氣の親父様、打明て物いふと、禮三様に意見の何のとやかま
しい、若い人の水の出端、若命生害に成た時、千日に薙た萱じやく急
あ事でさへあく、パ、面の仕様もあらふに、わつか二百兩の金故に大事
の相撲をふつてやらざ成まいと思へば、ふがいあいやら口惜いやらで
おりや胸がさける様あ、道理じや、／＼＼＼去あがら、それ程の大
事の事、連添女房に隠してゐる、お前の心が聞へぬと、恨涙に、時うつり、早
追々の呼使、ア土俵入でござります、早ふお出あされませ、ちやつと／＼

に岩川が、しほくとして立上れべ、もふか前へ行しやんすか、鉄が嶽
を抱込んで、正面の通りいきや格別、若も行ねば絶命、是が暇乞にあら
ふも知ぬ、さらばと斗一聲を跡に残して出て行、こゝまあ待て岩川殿、たつ
た一言いひたい事と見れ共跡へ雲霞がすく霞、コリヤかふしての居られぬ所、夫の命
よかゝる勝負しゆぶ、わしも是から相撲場へと帶引しめて夫の跡したふて
こそひ、行空に、闇櫓ひづきやぐらのどうからと打仕廻ふたる太鼓より、鳴渡つたる岩
川と鉄か嶽との相撲割わり、表にべつたりはり紙も、ぱりさく木戸口押合へ
し合早土俵入事終り相撲の數々取盡し、中入前ござましき、東西東西／＼
道頓堀宗右衛門町、北野屋七兵衛様急用でござります、一寸木戸迄お出る
されませど、又も呼出ず相撲の名乗、入かへ＼＼勝負かちまつ也、今一番と夕日と
連て、西へ岩川／＼、東へ鉄が嶽／＼と名乗上られ玄うつと踏あらす鉄が嶽
こあたひ猶も玄よげ鳥の玄は／＼上る土俵の上ひやうすれ平番に一番の、相

撲と力む幾万人、えづまり返つて見物す。片屋岩川く。片屋鉄が嶽く。
せくまいくせかずと顔を見合せて、あつと引たる行司の關直と付入
鉄が嶽すつと兩腕指込す。元來覺悟の岩川が、既に危く見へたる所へ、進
上金子二百兩岩川様最負ると、聞よりぐつと岩川が始の氣色ぞこへや
ら、鉄が嶽が諸ざしをほぐして土儀へ引くり返し、力士のごとくすつ立
ひよいやくくと數万人、一度立て手をたきよみを作る。闘作
る櫓太鼓も打出の表ハ人の「山あせり、次第くにちる人の中よ紛れて
いさせきと、駕を昇せて北野屋七兵衛、來かゝる向ふへ岩川が、胸のもや
くやさつぱりと我家へ歸る戻り足、關取様出來ましたと、跡から付
てくる人に見付られじと駕片寄、七兵衛がそぞらぬ顔、ア關取さてく
けふかきついお手がら、ホ七兵衛殿、見てじや有たか、見た位か、ふやら取
口へわるかつたが引くり返した其つよきけふの相撲の譯が有て、き

つう取にくかつたが、あぢあ事がはり合に成て、あぢあ事とへ二百両の花か、ヨレ其花やつた且那殿が幸爰に玄や、逢て禮をいへ玄やりませど、垂れたれを上れバマサ 詞わりや女房岩川殿隨分まめで居て下さんせ、そんあら今の三百両ハ、ヨン買取、お内義の勤奉公志の二百両、女房共、何にを云ぬ恭い、サカシ駕の衆、やつてと北野屋へ氣轉きかして駕の垂、内へ歎に暮近く、入相つぐる鐘諸共別れくくに行末ハセ。

第三

昔の京と難波浦春雨ゑげき夜の道、錦木諸共、禮三郎、相合傘がさの濡事ぬれもひつたり濡る、横玄ふきヨコスカキ太夫、道々もいふ通、わがみの身受の跡金故、岩川の女房が勤奉公ハジメルをすると聞、代にそあたを北野屋へやらふとへ思ふてゐるが、廓くらわと違て、いかふ勤にくいといふ事玄やぞや、禮三様と玄た事が、義理よつらい勤ハ有マい、お前やわしが身の上迄段々世話に成マが

らかとい様につとめさして、ござふまあ義理が立物ぞ、是非共かゝる此身の上、受出されぬ先じやと思やわざやひつとつも厭ぬといふも涙に聲くもる^謂、道理じやく、何をいふも皆わし故、日外團右衛門めに銜^たられた金の事、詮義をせふにも、肝心の團右衛門が行衛^ハ知す、何もかも身にかかる難義の果り、まめづゝ、よ消て行すべ成まい、と我身へくらき闇の夜に、光る眼も地の目率^{じや}、向ふにすつゝと鉄が嶽^{ヤマ}よい所で錦木太夫、岩川めに負た意趣^{じゆ}、さらし、うぬを是から連て九平太様^ハ、手渡しすりや、一廉金に成仕事^{シテ}、うせいと引立る、鉄が嶽、錦木^ハ禮三が身受して、今でれおれが女房、其女房を連ていて、金^ムせうとい監人同前、われを代官所へ連て行、サアうせふれと引ばつても、ちつ共動^{うごか}ず、毛二才め何ひろく、うぬ^ム引ばられて行間、此手^ハをふして居よふと思ふ馬鹿^{ばか}つくさずと太夫を渡せ、いやといふがさいで、幸邊^{あな}み人をあし、手短^{みじか}ふばらすぞよ^テ、譬^{たゞ}

此身の様成ても太夫をやつて岩川へ言譯立はシ其岩川が猶
けたい玄や疫病神で敵の傍渡さみやかう玄やと踏飛せべのふニ待て
と錦木が立寄腰際引つかみもふ了簡がどむ玄やぶり付、禮三が首筋引
とらへひばかり骨見る様ふざまをしてちよこ才すあと引寄て握拳のめ
つた打かよへき錦が手ふ當る小石撃でばらくく、礫み眼くらまき
れ油斷大歎禮三郎、こまた取れて鉄が嶽體のおもみみうごめく背中、す
かさず禮三が取て伏爰構はずと早ふく、必怪我玄て下さんすあと心
の跡え島の内、北野やさして別行はねかへしてたぶさ髪撃でぐつとの
りかゝり、サア太夫をどこへやりおつた埋だ所をサアぬかせ、此鉄が嶽を盜
人とぬかした其腮げさいてくれんと踏付く、引廻されてもかよへさ
禮三、手向あらぬ無念泣いかみ手ふふ物じや迎、余りむごいどうよく
じや、やうよくどの僧が事、九平太様へ極る身受、岩川めが邪广するも

皆僻からおこつた事、じたい此あましらけた玄やつ頬見る度と、虫睡
が出る泥ばく似合た是くらへ、と、國だ、泥を口の内もふ是迄と抜かくる、
柄元しつかど、やるへく、こりや僻毒もるのじやあ、ちいさい形して、
相撲取を殺さふと、せうのじだんだ叶へぬこつちや、サア切くと引
抜て、樂に争ふ其中み又もふりくる、雨の足、禮三引足放さぬ我武者あ
あたこあたと引廻されて稻村の、内も出る刀の光、鉄が嶽が肩先ぐつす
りうんと一聲、あむ三寶手が廻りしか何とせんと心おづく一刀、うぬ
ゑらい事ひろいだあと、抜て切込白刃と白刃、稻村かげに窺ふ曲者あや
あき闇の黒裝束、だんびら提後を助る加勢のめつた切、禮三が所爲と思
ひ込、切込深田の泥まぶれ、猶ふりかゝる、雨ぐもり、足も玄ぞろよ胸の闇
よくしと思ふ一念力、ゑぐりくるく、曲者がおどす足音禮三郎、又もと
いげの身もわあく、心そやろに千鳥足、こけつ轉びつ逃歸る、とつくと

見すまし探奇、といめの刀、一ゑぐり、さひる足もと落たる鞆。紛めた思案の向ふへ提燈暫く忍ぶ、身の廻り雨具よかこゝ立派の侍家來を先に來る道筋、落たへ何と手に取上、明を持と挑燈の、灯かげよ見付る透の血汐、切たをされし大男、アこりや身が屋敷の拘の相撲鉄が獄、何にもせよ心得ず、と内改紙入々取出す一通、詮義の種と聞く間讀間稻妻の、提燈バツたり曲者ハ跡をくらまし落て行

第四

昔ハ西又根津が關今ハ東又白川の、關も物かゝ磯よ見るあみくみてハ大阪の關へゆるさぬ場所又、類ひ名取の千羽川其川風にもまれてい、四ツにも組ん柳腰如在、内義の世話に成、おオハさいつ比々も爰よ仮住仮初の、縁を鶴屋の禮三郎、合せがるたのかゝる島有もし玄らぬさま育丁雅でもあい相撲取の、ひよこと見へるうそく、前髪かゞ口から、藤繩

半右衛門 やます、吉兵衛様の渉病氣ちつとよごんすかけふ畫綱ひがしみ取まし
た此いあおすそ分やす、お心よかけられて。殊にいあへ吉兵衛殿の
相角力、追付是みあやかつて力付つか志やる吉相よふ禮いふて、は太義じや
と、酒紙さけに百口先で、ころりといへす手取かく、合せの勝負かちぶよむかるた、一
万二千二万五千、三万八千がふ才様の勝かつふして是が勝じやぞいあ
、不器用ふきようあふ才様さいじょうまた覺さんせぬか、サニ歌うたがるた取と違ちがふてむつかし
い、物じやわいあ、ナシ是がむつかしい、禮三様らいさんじょうに末永すえながふ合せの勝負かちぶ跡しおりの女
夫めおとの一一番相撲と世間廣ひろふ出ぬけるかため、團だんの小野川お才様さいじょうよいや、く
と譽ほめられて、赤らむ顔おもての朝日山あさひやまとけぬ心の禮三郎らいさんろう合あわせにおいてれ我等
きついすいはうあれど、かう札ふりがきてはいかぬ、其等そのわでも有、此間から段
々と詰らぬ身の上じょうをう思案しんげんしても叶かなへぬく、叶かなへぬ戀こいと思ふたよわ
しが様あはうよ縁の悪縁厄縁でござんせう、又かう悪ふもくる物ものか、いつ

そこから身を捨てたむ三寶命を取れた、是あア氣にかゝる事いへちやんすあ。もふきついめにあられどんと禮三が絶命、レまだいあ。お才様の業じやあい其科へお前じやれいあ、そりやあせみ、お前が切玄やんしたじやあいかいあ、何をわしがいつ切て、レ今程お前のでよ切た札科人へやつぱりお前身を恨たがよいわいあと、つい手合、よいふ事も疵持足の裏せざ心置る、折も折も破編笠人相へ見ねを見すく悪者作り、うそく覗くありそぶり、小氣味悪さみ禮三郎ア誰やら人がと納戸口はづす弱みへ疫病の神様株が伸上り、こりや花々しい勝負でござんすの、一望姓忘てこふか、おか様四五十兩かして下あれ、貸ても借かさみやねだ切りたくるのじやと、呑共いぬたばこほんきせるとぶどういやがらす、お四八さゝぐ色もあく、金が借たい、安い事やの、五十兩あせ五百兩あせ、何ばあとかさみがこあ様誰じやつひよ見た事もあ

いすべいい人よもじきあかでもかして、こちらの人よ立ぬ、此女中様と
合せがるたのあじや、ら事、勝負事の何のど、人聞の悪い、こつきのおどし
くふのじやあい、出直さんせど取あへず、あめ上るあ、ほ法度^{はうど}の勝負事を
商賣^{しょうばい}みする證據^{じょうきょく}みへ、今おれが影^{かげ}を見て、隠れおつた男め、ちらりと見て
もさす物じやあいわい、げんさい相手みするのじやあい、爰の亭主^{ていしゆ}へ何
といふ亭主^{ていしゆ}よ逢ふく、イチの人の瘧^{やく}を病で久志う寝て居らるゝ、殊
みけふれおこり日でそんあ事聞すと忽大熱^{だいねつ}そりやよしにして下さん
せ、だまれやい、病氣あらてこのぼんやせいといふ敷^{ひら}しが有が、出さらぬ
や爰へ引すり出す、これく、夫バつかりへ堪忍^{かんにん}して、コレ拜^{まが}ますと詫^{わび}る
程、何じや有ふと亭主^{ていしゆ}めを代官所へ引ずつて行のじや、出されくと猶
聲高病家の一間洩聞^{きえい}へ、およつく、おれよ逢ふといふのへ誰じや、出
て、逢ふといふ聲も、病よ屈^くせぬ大男大坂一番千羽川と、一目に見る鬪取

風、見るるよつと鞠くまれ顔、わし又逢たいといこあ様か、^{アラ}爰の亭主といふへ、^{アラ}わしでごんす、^{アラ}アコリや叶ハシぬと逃出す、^{アラ}くく待んせ、様子聞てから其跡で、きつと馳走ハシマシもせにやあらぬ、其に馳走が痛入ます、^{アラ}遠恵のあい事、わしやをふかアラが知て居る通土俵の上の勝負ハシマシ外、腕立する事が嫌ハシマシひ、久しいの煩ハシマシひ余り氣が重い故、昨日月代ヨクダにして見たれどまだおこりが落ぬ故、いつからやらふつアラりと力業ハタツをして見ぬが、腕がためにまかアラ、そこぞ入ぬ體カラダが有あらばきく、^{アラ}擗碎ハシマシタて見たい、^{アラ}これ何を其様に震ハシマシふのじや、^{アラ}こりや、お前様のアラこりの身がいりでござります、ちよつと爰へ何んせ、^{アラ}もふ夫へは憚多ハテい、^{アラ}行んせと女房アラ、突やされてもびつくびくハシマシよおられし臺ハシマシ頬見てやらふと禮三も立出ハシマシ、^{アラ}儕アラハ善九郎め、團右衛門と一所に成てよふ勘當ハシマシさしたあと、胸ぐら取手ハシマシを乞ハシマシつかと取ハシマシ、禮三殿、此善九郎アラこるた故に、かういふ風ハシマシ躰、我身アラ恨ハシマシず逆ハシマシねだ

り、夫斗じやあい、一昨日の晩難波裏で鉄が嶽が殺された、其殺人も大方
違へぬ、詮義が有ザアわせいと引立行善九郎が、肩骨掘でぐつと押付か、
手拭ひと手ばしかく、腮立させぬ猿轡、五尺の骸くるく、卷詮義の有盜
人め、身動ひろいで邪廣よ成、ちつとの間をこへあとふち込んで置たいが、
テどうせうぞ納戸から、幸爰に明半がい、猫の爪とぐ様にべた
付てゝ面倒あ、いつそ爰へと疊の下、幸すびつのああかしこ逃さぬ思案
の、極樂落し、跡踏玄めて立直り、テ是で片付た、あゝ玄て置たらこつちの
儀、禮三様も何やかや、定て意趣も有けれど、畫へ目に立ま、晚の事、成程
くとつとは是で胸がはれた今夜中よ岩川にちよつと逢ねばあらぬ譯
行てきませうと立出る、テくお前の脇指へをうあされたマノ夫ハ、ござ
りませぬか、御勘當のお身の上ハ猶以て世間へ外聞あせ九腰でござり
ます、どいふよ返事もさし誂り、行當る顔尻目よじろり、大方誰ぞを頼で

質物にお入あされたで有、あの脇指の親^{おやぢ}からの涉秘藏^{せきざう}じやびあすを
や見^みえりの有一腰^{ひとこし}、そこからどう廻^{まわ}つてひよつとよんあ所の手へ入た
ら、お前斗^{おもて}か親^{おやぢ}の名の出る事實^{じつじ}ハ身の指合せ、金^{かな}さへ有^あば買れる道
理^ぢでさへ太切^{おほき}、まして親^{おやぢ}の血^ちを分^{わけ}て譲^ゆ受^{うけ}たお前の身^みハ猶太切^{おほき}、そこへ
お出^だあされふ共^{とも}、必命^{ひめい}を大事にして、聊示^{れうじ}あ事^{こと}あされます、かういや艶^{えん}
らしけれど、前方^{まへ}ハ志^しみぐ^くと物^{もの}いふても下^{くだ}されあんだが、お才様^{さいさま}の縁^縁
ふ連^{つづ}て、今てハ次郎同然^{どうぜん}ス、念比^{ねんひ}よして下^{くだ}さるお前^{まへ}じやふよつて此^こは異^い
見^み、惡^{ごん}ふ聞^きて下^{くだ}さります、あは合^{あはむ}點^{てん}かへ、早^{はや}ふか歸^{かへ}りあされませど、明^あて夫^お
との夕間暮^{ぐれ}口^{くち}よいハねど過^{くわ}分^{ぶん}さを、拜^{まつ}が諸事^{しょじ}の禮三郎心殘^{むな}して出て行^く
テ。お早^{はや}ふへも口^{くち}の中^{なか}、まだ夫^おとハ云兼^{いそ}る、おぼ^こ娘^{むすめ}の案^{あん}じ顔^{がほ}是^{これ}ハ扱^あ追付
戻^{もど}ら^えやる人^{ひと}を、をふ一生^{いっせい}を逢^あれぬ様^{よう}、何^{なん}でございはますぞいの、尤^{とく}錦木^{にしき}
といふ色^{いろ}が有^あと、禮三殿故^{ゆゑ}欠^{かけ}落^{おち}迄^{まで}去^{はな}てござつたお前^{まへ}、氣遣^{きやり}せまい吉兵^{よし}

衛が添します、とへいふ物のお前より云号の侍丹波の侍家中津田兩
助様、まだ縁の切れませぬぞへ、方一先から大坂迄詮義すまい物でもあ
い、かゝ余り外へ出しますあ。ナソリやお才様もお前の事、今とつくりと
養生忘て、秋の相撲から出にやあらぬ大事の體を、ちつとよいと月代剃
て氣丈立が悪いわいあげふへ又發日じや、寒けのこね内蒲團ふたんでも着て
居や志やんせ、何ぬかすやら、タ立のせぬ先よ下駄はいて歩れる物かい、
あんば煩ふてぬても地取あとすりや氣合がよふある、おいらが内よ寝
て居ると、鳥籠に鶴入た様で氣が詰つて一倍悪い、そんあらせうあと勝
手にさんせ、何でもわしが云ふ事へ聞んせぬ、相撲取へ女房のいふ事聞
ぬのがゑいのじやわいと、きでつあ詞も闘取の中のよさとぞ志られけ
る、日もくれ過て藏屋敷の奴が挑燈目印を尋来る立派の武士、千羽川の
吉兵衛殿よしわざんでんへこあたか、アイとあたでござります、イヤくるしいうあい者、在宿ざいしゆく

あらべ御意得たし、手前が事の池田兩助と者、あの兩助様、そりや丹波の御家中、いかにも左様、是れまあ時も時、兩助様じやといふとしらず聲を驚くお才、心半乱半がい、のふためき隠す小屏風又、押かこふ間も有やあし、ひ免あらふと打通れり、そゑらぬ顔に手をついて、吉兵衛とアヘ私津田兩助様とやへついに承へりませぬか何用有てかよふこそお出、私もおこりを病まして、見ぐるしい病家、無禮ひは免お茶上ませいと落付て、腰をすへたる心のくばり、成程存じ召れぬ筈、手前初て參つたり、ちとお身に尋たい事有て、其子細ひ、身共が屋敷丹波の拘、鐵が嶽といふ者、一昨夜難波裏にて切殺され、何者の業、其知ゆさぬ、此儘に差置て、國の耻辱、若ハ相撲の遺趣切か、ひ身の商賣脉あれバ、知まい物でもあいと存して、ア夫でお出されたか、そりやもふ憚あがらきついて了簡違ひア第一負ても勝ても、相撲に遺趣といふ事のあい事でござります、殊に此

仲間で喧嘩事がきつい法度、又思召ても渉らうじませ、相撲取が我儘に、喧嘩をすいて致そふあら、世界に人種へござりませぬ、尤然らば今一ツ尋たいが、お手前の近江の星敷三嶋彌太夫みやつうと出入するども、其娘ふ才を女房に受ふと契約した兩助然る所か才に、不義の男有て勘當せし由、今にも顔を見合すれば侍の戀路、眞二つまことつよぶち放さねばあらぬ時宜、彼不義の男ハ鶴屋の禮三と聞た斗ついゝ顔を見しらず、こりやお手前存じて居ぬから、様々の事をお尋、相撲取とナ者ハ大坂中の町人衆、皆あつちからいらせん存知あれど、こつちに一々覺ませぬ、山伏の内へきた様にちとおあぶりでござりますかと猶押強よふ押がこふ屏風に女房が胸ひやく、力めべいと、身の震ひ、吉兵衛よしふなもはつと斗たたか、お侍様御歎されませ例のおこりで俄の寒さむけ、女房共羽織はきくと身み引かけてそこそこが毛包廻せし氣扱きあつかひ、顔も一曲朱鞆しゆとの腰こし、居士衣きよの裾すそのざん切髪せんせつぱつ、吉兵衛殿

お宿とねりとござるあ、男氣おとこけいあこあたと見受みうけちとほ無心むじんに參つた者もの拙者しょざ元もとの由緒ゆいしよの武士士官浪人ろうにんの世渡よせわたりりそと致いたした劍術指南けんじゆしんげん面目めんぱくあいが尾葉おひばを枯かからし差さがへの一腰賣一きょううりに參さんつた、何なんと求めて下おろされまいかと脇差前わきさまへ指置さしおきべ是これはまあよざあいおつゑやり様よう傍浪人わきろうにんのお嗜定たしなみて天晴あまはれ道具うぶるでござりませうが、町人まちにんの爲ために猫ねこに小判こばん、人切ひときりすべ存のぞせねへ乃物買ふ様ようがあい、其脇差計わきさまへ、こあたが買かつゑやれにや成なまい指さしへ何なんもせよ、心こころをとくと目利めりしてお買かふされて下おろされい、よ、心こころの目利めりへ私わたしもふ得手とくあれば、左様ながきあらべど、ちよと拜見ほひけんと抜ぬかくる、鉏くわの血汐ちしあと鰐口じのくちびつゑやりナシト其心ながきを見て、外の手てへやられまいがの、イニヤイかへつた所ところに有あた脇差わきさま、出だ所ところへともかくも氣きに入はた買かませう、其脇差兩助わきさまりょうすけが買かいやそみ、いつかあ事成ながきませぬ、吉兵衛よしべが買かました代物しろものへあ、千兩せんりょうの折紙さくし、金かながあくべ質取しつとり生なまよ、其質物しつものへ是これ爰いはにと、小屏風びやうふくへらりと引退ひりたいれべ、何なんとす

る。刀物のかへりに女中道具の小袖櫃、此塲又有ての事の破に成そ
ある物、中改めず。此儘で質に取たい。あの半蓋、いいやあら千兩、價
へいか程へど、先其心を兩助が改んと立寄を取て突退蹴上る疊下から
ぬつと以前の善九郎見合す浪人、お頭といふ間稻妻吉兵衛、かけさみ
すつばと紅の、脇差目先へ差出し、お望の心、とつくりとほらんをされど、
居合腰調、見事く鉏元々切先迄徹盡雲ぬ男の魂たまひ、天晴驚入、眼前に人
を殺した吉兵衛一人の科迄身に引受る心で有ふが夫ハそれは是ハ是
ハんやそやつ夜盜と見へた、どふで首のないやつ併ふしきあへ最期の
一句かへつた所に近付の有盜賊め、詮義の種にも成へき物ハテ殘念と兩
助が尻目よきやつも底氣味悪く吉兵衛殿金子調達只今急にも成にく
からふ、其脇指ハ預て歸る、有無の返事を拙者が宅へ後程迄に待テ、涉
浪人の所へ天王寺樂人町澤田伴龍とお尋あされ、澤田伴龍殿、今宵中

に屹度參らふ然らばおさらば、お侍是にと斗黙禮に邪智を懲して立歸る。詞兩助もお暇アサふ段々子細の有そふある事、身共が用事ハ人殺しの詮義斗、武士が頼に參つた詞反古ヌも成まい、お身此詮義迄ておくりやれハ人殺しハ私、こいつ只今ハ盜賊あれ共元ハ善九郎とアして鶴屋の手代、夫あれバ猶以て、そやつハ殺しても大事アい、此兩助様子具に存てかる、鶴屋大恩の下人として、主人の金を横取玄たやつ、凡引負の科人ハ主人の家よて庭成敗に行ふが大法、天罰ハ遁れず自然と主の刃にかかる其脇差の出所ハ、いへぬが秘傳の折紙道具必々いづ迄も身を大切に虚事のあい様、お手前ハまだ知まい、お才が親三島彌太夫事、預りの長光の刀紛失の誤り、此刀が出ぬ時ハ彌太夫の身の大事、夫に付て鉄が嶽が死骸の傍におとして有た此紙入こそ一ツの手がゝり、是をお身の手に渡さば、其中に其方の入用の物も有ふ詮義の筋が見へたらば太義あがら

身か旅宿迄委細畏り入ましたシ貴公様へいづ方より旅宿の所書則認め参つたと差出せば押坡ひらきアことやお才殿への去状のぞ、道程のりハづか三行半怪家のあい様去荷はの注文、無事に落付身の行末此上あがら頼入万事後刻と諸事の譯胸で納めた千石取藏屋敷へと歸らるゝ妻も立出危い所漸通れた半益がいの、二人が悦び吉兵衛い、兩助が詞のはしド紙入の内うちる出る状一通、くり返し見て驚面めんじ色心得ぬ澤田伴龍さふでもさやつにハ子細が有コトヤかふしてハ居られぬと脇差わきざばつ込門口へ、女房内に氣を付いといひ捨つゝと出て行サクくお才様悦べしやんせ、今日といふ今日此去狀が禮三様と女夫のかためほんに是も兩助様の、おかげくと足跡いたずを戴いたゞく疊たまむつくりと思ひかけあき以前の浪人うなづ盜賊とうぞくといひせも立す、かよつが小腕かわなさけ緒の早繩、打込戸棚の錠前ちようぜん忘わすつかり、お才これい事ことれあい、そあた故に浪人した團右衛門じや、吉兵衛いを出しぬき竹

垣破はねつて忍ひ込だも、そあたを連ていのふ斗とじや、おれわれわれに惚ほて居る、われわれわ禮三に惚ほて居る、定さだていやで有あふけれど、かう饅まんが見入ましてからくへ逃なても逃なさぬ、いやでもふうふうでも抱いだて寝ねる、爰ゑへおじおじやハテおじおじやハテいのふふととともふふ、悪い時にあれへくくも女聲めのこゑ、あんぼ呼よでも吉兵衛よし兵衛ごんえの爰ゑらにに居ゐぬわい、叶はぬ事ことじや枕まくら直ただして抱いだれて寝ねいとと根強ねづよふ仕つか込こうういいべみ眼まなこ逃なさぬ門口もんぐち吉兵衛よし兵衛ごんえが戻もどりかかつて戸戸をたたけけば、内うちに物音ものこゑ吹ふきけけす行燈あんどん明あぬぬふしきと表あらわから踏碎ふぶくだく戸戸の破口やぶれ、互たが々まことに探さるくら紛まぎれ闇やみあやあし摺すりちがふ、手てにささりつたる帶おびの端は、すつばと切きて團右衛門跡だんしやゑもんをくらまし逃失なげゆたり、吉兵衛よし兵衛ごんえが、お才才能が、帶解おびひろげてひろげて何なにしや、手てに残のこつたる男おとこの帶おび、こあ様あやしむ、禮三殿らいさんに添そそそふと思おもふ、吉兵衛よし兵衛ごんえをかへかへみてこりや外ほかよ忍しのび男おとこが出来あつたたの徒むかし女めの郎らう、人ひとであはし、道理ぢ道理ぢじやくくく道理ぢじやくくく道理ぢ此言譯いひわけのおよつ標ぼう、出だて下さんせ記きぐくたつつく戸戸棚たな銃やり鎗やり槍やり切きて引ひ明あれべば、

こちの人遅おそかつたわいの、最前の浪人が、わしを縛しばつてふ才様に、無肺の懸けん
慕まつ、マツくそんあらあの浪人はうじんへ、兼て咄とつの、トツ村岡團右衛門、扱あつこそ知した程てい
行ゆまい此道筋詮義の近道逸いつ参さんに跡あとををしたふて、「追おて行ゆ

第五

天満大川一飛いちひに南みなみのはづれ寺町筋、直ただには行ゆぬ團右衛門うねくる野道
幾筋いくも、真一文字まついには伴龍殿ともりやと、呼よたは誰だじや、イ吉兵衛よしふさむでごんす、是は
く、大方彼脇差かれわきさの返事かへご、金子才覺かなこさいしやく出來でましたか、イ其約束やくそくの金子かなこの代しろ、其
元もとに買めて貰もらひたい物ものが有あて、スリヤ脇差わきさの價あたひにはシマあ何なんを、是はと差出さしだす帶おびの
端はし、ハツ胸むね、アツ伴龍殿ともりや、是は斗たたかへこあたが買めにや成なまいがの、ドいかよも買めふか
い、チ價あたひハ千兩せんりょうこあたの胸むねに時ときへた、惡事あくじの筈用はずよう受う取くかい、イ何なんも覺しゆく
いとふり切きりて行ゆ朱しゆ鞆ともの鑄つしつかと取とて卑怯ひきやくあ伴龍ともり代物しろものを見て返事かへごも
せず、コどやそこへ行ゆ其代物しろもの所望よほにあい持もて歸かれいつかあく、玄か

けた出入り互の命、そつちへ賣か、こつちへ買か三才まあ板工のべれ口、
あせ放さぬ強氣と不敵、手練の當身にうんと斗、下地のおこりに身へ
かぢく、足踏きめる、其隙よ遡てもとつこい遡さぬく、伴龍へ急の
用事退て通せとかけ出す、向ふへ廻つて又取付、きやつも一世の大事の
奥の手、鉄術達者の伴龍に、一寸引ぬ男の魂右へかりせば右に立、左へは
ければ引戻す互に大汁たらく、おり、腰よすがつてぶらくく投て
も踏でも放さばこそ。さしもの手者も持余し、一度よせつかり地響に一
息ほつとあぐみし面色、扱々丈夫あ魂あ男、凡鉄術一度にひ、誰といつ者
あけれ共、お手前が土性骨よへ伴龍も叶ひぬ、畢竟が元へ此方から、志か
けた出入のあふむ返し、是で五分くといふ物、其方の脇指の事も、此方
の帶の詮義も、口外へ出るねば濟事もふ了簡玄て歸させられさ、夫共に聞
分あけりや手並へ今見る通り、此度へ吉兵衛わが命があいぞよ、もふ是

切でサク歸れくと云捨立上れバイテ天満の吉兵衛が出入をかけて、
病犬の棒、まあふた様に逃ばへにして、立ぬひい、殊に相手ハ鉄術仕ぶ
たれてすびく戻つたといふて、此頃が出されふぞい、もふ何かも
も外の出入ハ取置て、こあたよぶたれた此顔を立にやあらぬ、猶金輪際
付まどふて、こあたを殺すか、おれが殺されるか二ツ一ツじや、命ハ始か
ら投出して有わいの、サク殺して下あれ、殺してもらをと胸打たゝき歎
さん氣色ハあかりけり、成程尤じや、お手前を殺せバ身も解死人、何の
益に立ぬ事、互に命を果す道理、併身共にふたれて此儘、歸つてハ男
が立まい、何と命を捨ず共男の立仕様ハあいかい、一札が貰たい、ナ町
人出入ハ高が相手を誤らしてさへもされば、そこへ出ても男ハ立命が
おしく、伴龍誤り證文書て貰ふかい、やはてあちいあせりふよ成た、
授られて誤り證文取どり、神代の昔から聞ぬ事じやが、夫で腹のいる事

あらぞふ成とせうわい、そふあふてゝ叶ふまゝ、ちやつゝと書れい
と、腰のやたてもみがき込、廿三夜の月明り心の雲墨黒々誤り證文件の
ごとし、澤田伴龍と書認め、差出せば懷る取出し合す證據の一通、墨色
筆法紛ひもある同筆、渉約束の通備前長光の刀、追付指遣し可ヤシ、九平
太殿村岡圓右衛門、其状へと取付を一當あてゝ尻引からげ、又立かゝ
る伴龍が腕首ちつとも動せず、刀の盜賊圓右衛門、九平太方へ長光の刀
賣てくれと頼の状、使に立た鉄が嶽死骸の傍に落して有た簪が手跡、此
手とくらべて見たい斗、投られてやつたのを誠と思ふが簪が天命、西
國江戸方の關取ともんできだ此體、うぬらり小指も足物かい、お才殿
の懸の意趣禮三を殺して仕廻たがる工の一、引くゝつて屋敷へ連行
何とかを白狀さす覺悟せいと腕付れば破かれと村岡が差込腕合點
と、かついでさうと車投、柴鞘の一腰引たれれば、それやつてゝとしがみ

付ひはらをはたと眞の當うんと倒るゝ其隙に月よきらめく刃の光り
鉢に鳴の彫物ほりものへ、お才殿の咄あざえ違たがへず、正しく是が備前長光長光、忝たがしく
押戴おさわぎ押戴おさわぎく所の大勢物音おもてものこゑ、喧嘩けんかへと立さへぐ、ア棒の端はなちつとで
も當るがさいご爲ためみあらぬ、千羽川の吉兵衛が喧嘩けんかの立引見物せり、
いつへ段々詮義の有やつ、連ていんで活いきを入れて存分いへせにや
あらぬ、天満迄付て來て、立引の譯見て置と、腰にばつ込長光の刀の詮義
伴龍が帶おびの前がへわが帶に、しつかと握つかる證跡しおづきへ隠れ、紛まがひも大坂に、男
の吉すい闘取の天満てんまをさしてぞ

第六

中居衆なかゐしゆへ、中のしやざり打うちやんで今座付ざじが始まつた機敷きふへ西の二三
の續つづき東の五の下孫の出共に、五組のお客きゃく様方さまへそふすしや、火鉢ひばつへよい
か、たべこばんとわめげべ奥おくより中居のふ品走出だ、庄七殿やかましい、し

やきり打切たも知て居、夫でお出といふけれど、此藤江へあせ來ぬ。あれ程約束して置に不參が有て、あらぬといふで、最一度せきよといふ中々、奥々出る長崎客刀提^{ひつ}中居、顔見せ見るとて一人へ見られぬ、呼にやつた女郎へくるか、お前のふつしやる新造様へ、奥に来て居さんす錦さんとは是にござんす桂^{かつら}さん、跡の女郎様方へ皆前からの忘れた顔、錦さんへ曲輪^{まわ}からお出たが、若西でのふあじみかへ、いや西にも東にも近付へあけれ共、身共が望む女郎へ是迄勧^{うな}た者あらず、そんあら錦さんでもあしきぐずくと隙がいる、藝子^{げい}へまだか、あせ急に呼にやらぬとばちくへせる山出し炭^{すみ}おこり、ちらせば、傍尤もふく爰へといふ間をふく、里^{さと}名代の藝子の藤江、いきせきとくる上り口、そぞや藤江さん遅かつた座敷へさんぐ、ほ機嫌直すお醫者^{いのしや}へお前^{まへ}お藥箱から上ませう、けふの北のあり七へいて、きよのさゑだ荻野蛇^{おぎのへじや}の様あげいこ

様み引とめられて醉たわいあ、ラ藤江といふへ其元か、待ち兼たく、か
げ繪の名人と有^ゲ見たい。三味線が聞たい、尺八が所望、舞が見たい、せ
ひしむ、其様に一時にどうあるものじやいあ、あんぼ藤江さんじや迎、
そぞやもふ八人藝の座頭^{ざとう}であげどやいかぬ事、こあ中居共へ、身共がい
ふ事一つも用ひね、拙者が所望する事あぜ邪^{じや}广^{ひろ}する、これえかりあいあ、
其様みむえやくえやと立た腹^{はら}み^{ハラ}紅葉^{もみぢ}をあがす、それ、ちよつと
お間致しまえよ、うれし、藤江さんよふきておくれた、ニ桂^{カツ}さんのは挨^{あい}
拶^{さう}いたみ入ます、錦さんへどうえやへ^{ハシ}是もいんまに、れしいしさしじ
やわいあ、そんあら又お客が、やしきしもしちしじやあろ、何の事じや、長
崎でも聞ぬ唐音^{だういん}、こりやおん共が事そしるのじやあ、いかふ心にさへる
わい、何のそふで、あいわいあ、とかく座敷^{ざぐら}で叫^{さけ}ば、余所のかいひ色事
咄^{つぶ}し、錦主^すも長^{さや}である、こいつ、三味線へ引す、影繪^{かげゑ}へ見せず、踊^{おど}へせず、長で

あろとへ身共が、鼻毛はなげでも笑ふのか、其長とへ何の事サア夫ア、長やれく
花のお江戸ハ兩國橋りょうこくばしとや白い手拭てぬぐひ横長よこなである、長の因縁いんえんかくの通り、
とへ志やれく、問きま志シよく、何なにと問志やれ、お客きゃくへく、はんこでござ
ざんす、びいこへく、ばゝ様ようく、中居なかゐへく、がしこの色事いろごと、よい此このく
頼政よりまさ、ぬ志のしを射留的留て、機嫌きげんを、ああをす藤江とうえが口車くちぐる打連奥だれんおくへぞ入いりにける、
行燈けいとう居眠ゐねむる時分ときを忍ぶ、禮三らいさんが懸けんの畫錦ゑんきんが揚あがへ足代あししろやの、くゝり半なはに窺うかがふそぶり内のぞいを覗のぞて小手こて招まねき、目早く見付みつける中居なかゐのおさか、門口もんぐへ走出だ、
禮三様らいさんさま、お前のお出での合點あてにしさんもわたしが所ところへけふ出でぞめ、役用わくようが
有あらわたしが呼よ、おはいりと取持とりぶりう、其事ことでちよつときた、今夜よ
あひねあひねばあらぬ事こと、爰あひの客きゃく、一原九平太いちはらくへいたで有あふがの、あれにへ逢あれぬ首しゆ
尾びを見て此こみを、錦きぬにそつと渡わたしてたもと背中せなかをぴつ志シやり、頼よりむ者もの
たのもしきのしきが、さすが所ところに住すばあり、禮三らいさんの門門を西東せいとう忍しのぶに目立大挑燈てうぢんとう

北名と書ひいきより、立子はふ子よ譽ほめられていなにへあらぬ岩川も、心い
きせき足あし代じろやの門で見合す顔と顔おもて、禮三様みやげじやあいかま、治郎かお前
を尋て漸爰迄ゆく、聞きや錦さん来てしやげあ、其事こと隱して居るよ、され
ば錦様ぎんようをかうせまい爲ため、わしが心こころを盡したも水の泡あわ、あの人に勤さして
ハ、おれが顔が立ませぬたま、尤さうじやく、あれもあがう勤さすでもあい
其こんたんが猶氣ゆうきつかひ、是非ひせい今夜よ連ていぬ、お前も何んせと手てを取
バば、其客といふいふ日外ひその一原九平太いはらくへいた、おれがいてハむつかしい、もうぞ
隠れて行たいが、夫あらわしが仕様しうが有あり、行丈ゆきだけあいぬ長羽織ながはおり人目ひとめを包
黒くろちりめん、頭巾かぶとも顔おもてへすつぼりと、さあから假着かりぎと見みへにける、サさく、お
出と門口もんぐへすつとはいれべ、座敷廻りざしきまわりの庄七しょうしち、やれ珍らしい關取様くわんとりよう、禮三
様みやげお出ぬので、南風みなみかぜも吹ぬがへ、ふけばこそ出て來やんした。客衆一人連
て來た、そこぞ座敷ざしきが明あて有あが、さう小座敷こざしきが明あてござります、サさく、是ぜへま

あお上り、お供のせこへじや、^{イイ}供の芝居へやつた。^エいやうああたれ
をあたでござりますと、問れてさそくの出ぬ岩川^{いわ}あれへ江戸方の關
取衆^{しゆ}じや、わたしへ法師様かと思ふたしてああたのお名へ何とやま
す。^コ貴様此關取玄らぬか、^{ミリヤ}氣^き疎^{うる}いあれが大關の里見山しやわいの^ミ
いつやら私が所のお客がああたの手の形を持ってお出あされたが、^タ見
ると聞とじやあ、^{イイ}惣判相撲取^いきぼそりがする、あれでも裸^{はだか}に成て、
まひしか、玄やると土儀^{ひや}一ぱい、見せたいあと鼻^{はな}うごかさぬ相撲取
とられてぞつこい庄七が、前髪^{まへ}の有源太様、我等の差詰百姓役、辻法印と、
里見山よみにた事じやと打笑ひ打連、座敷へうかれ行、今宵初て錦木が
縁と義理とに引されて、二度の勧も男故、座敷はづして勝手口、窺ひ出る
を案^{あん}し顔、跡から藤江が走出^い錦さんどうじやいあ、おさか殿の言傳物
渡す首尾^{しゆび}あるかつた故、大事にかけて持て居た、^タにつこりと笑ひ顔と、

差出す、文に飛立思ひ、まあ誰が持て來たへ、やつぱり直に禮三様、門口覗
て是へしたりと尋る中に、小座敷の頭巾羽纈で立出れば、ハコと鞠り立
寄て、^テお前へいつの間に、^{ヨレ}藤江主、若次郎が尋たら、此状渡して先へ
いんだといふて下んせ、そりや禮三様取て居る、わしも奥から尋てあら
そちらへわしが左平次で、くろめる中に奥とも、^テ藤江く、^アそこへ隠
さふ所も幸蒲園にくるく、衝立の障子ぐへらりと市原九平太、^テ藤江^ア
わりやそこよ何して居る、^{イエ}爰々顔見世行で、臺所に人氣があり故、はり
番してありまする、^{ハラ}實氣ある者じやあ、錦めがふらぬ故夫を尋に爰へ
來た、新町から南迄付まどへつて惚ぬく九平太、夫と同し様に付まとふ
虫が有ても叶へぬ物、金銀といふ物におさへられ、虫めかうござも、這
も得せぬ、氣味のよい事じやあいか、^ナ藤江、其金の有こそがね虫より、金が
あふて泣虫か、そちらよおらふと立寄を、^{トラン}かねに恨が數々ござる初

夜のかねをつく時代、せじやうめつはうとひらくあり、後夜のかねをつく時の寝滅めらくと、何しやぞいあ、此衝立の内へ、めつそうあ、
わしが商賣の影繪の樂屋、見せる事へあらぬぞ、^同衝立のかげ繪見た
い、火をくべつと燈て見せ、^同お目にかけまする影繪の始り、余り近い
と見へが悪い、必樂屋を覗くまいぞ、かう火を燈て致しまするが梅か枝
の無間の鐘、其歌おれが諷ふてやる、二八十六で文付られて、二九、十八で
つい其心、人の心もしらいで、面白そふに諷ひくつさる、おれが諷ふが氣
にいらぬか、^同間がぬけるわいあ、それよ、奥へ行へ錦様じやあいか、と
れく、^同ここにと立上れば、火を吹消てもふ仕廻、^同是からわつさりと、お
品殿おさか殿、^同呑直そふで、有まいかよからくと無理やりに、押立奥
へ連て行、此間にちやつと小座敷へ、關取様よ相應な、相手の手取の錦島
砂子屏風の土俵入化粧紙迄氣を付る行司役やら頭取やら、脊中のはげ

た古けいと、調子合ふたふ三味線の身に引かけるぞたのもしき、中居共く
錦へそこへ此九平太が目をぬいて、勘當受たるらずめを取込んで、うぬら
が懸の中立か、小座敷が物くさいと、立んとするを、^詞ナ、お前の餉ゑてござ
るのか、あの様あこざ酒で醉様あおれじやあい、^{サア}こへ高にかつ玄やる
のでなんであしこに人が居よ、居か居ぬか此羽織は^{羽織}と引たくり屏風びやうよぐ
へらりと引明れば、夫よへあらで大前髪江戸ばかりの銀ぎせる、煙輪けふすわを吹
空うそふきくつゝ、と吹出せば、さしもの九平太ひづ、悔がり仰天俄ひやうよに目をす
へ千鳥足、是は鹿相えぞ千万、酒をたべ過して思おもひざる不調法ぶぢょうぽ、渙免けんめんあれ
く、いやもうくるしうござりませぬぬ、お氣にさへつたら真平まへい。
ハ勘當も受ませず、元來人様ひとよみ虫むしといひれた事もあし、又虫で有ふ理屈りく
もあし、そんあ物じやござんせぬか、そふ共く、其元さへ其氣あら、拙だら
者あらわの安堵致あんづしたりと、行んとするを、ゆく、そりやああたのお羽織は^{羽織}でご

さりますか、いへれて、惄り持たる羽織、はゞく是へ重々不調法是へ貴公
のお羽織あ、私がぞんざ羽織てござります、是へく、勿駄あい其儘く、
是をほ縁にお近付、又來春へおでかしあさるゝである、其節へ緩と
醉ぬ所を酔さるゝ科をバ酒にぬり付て頬押ぬぐひ入にける、錦へそつ
と走出、次郎様のおかけよて、ひやいあ所を遁れたと悦べば、謂錦様、こあ
んに逢たい斗よ、さつきにから来て居やんす、お前を捕へて腹立るで、
あれ共をふつぶして下んすのじやわしが爲にハ太切あ禮三様、其方
方に連添をふお前、其勤つどをさすまい爲、われに隠してふとひめが拵た金、そふ
さしてハ此次郎が顔が、立まいと思ふてか、お前方か二人を、首尾よふ親
傍の内へ入たら、ほんまうそぞやごんせぬ商賣冥理、投殺されても大事
あい、是程に思ふのゝお前も聞へぬ、禮三様もどうよくあと、太切にする
眞實しんじつハ、誠に關取一正ひきへ、錦しづかへ始終差俯さづかとかふの諾のぞもあかりしが、其お心

が嬉しさに、禮三様と云合せ、親方様に譯かみいふて、けふからの此動氣遣ひして下さんす。此公界がいも暫しが中、其暫ときの中が猶氣遣ひと、せり合ふ中に奥うちとも、お品が走て、アリ次郎様、長崎のお客様、おまへにちよつと逢たし迎むかい。今夜よはおれも取込よい様にいふてたも、イマもふ爰いとへ見ますといふに錦にしきへ次郎吉様、まだ嘗なましたい事が有、後にくくと行跡あとはづへ、程ほどあく出来る田舎客いなかきゃく、是これくくめこらしいと立出る、顔見て、アリ、お前まへは淨久様じゆくさま、これくく常住急じやうじゅきゆあ所ところでお目にかくつた故ゆゑ、見忘れを尤まことにかくつた所でかくつた形かたち、よい年志ねんして傾城買けいじょうめに來た親父、其女郎めのわらわへ北野屋きたのやから出る新造しんぞう、こあた衆夫婦こあたしよの志しのぶがあんまり忝はずあさに、外の客ほかのきゃくに、ハ買めすまい、おれが身受うけする心こころで、今來て様子ようすを聞き、勤つくて居るゐる錦木にしきの、買めたい女郎めのわらわの爰いとに居ゐず、此金かなもいらぬ物もの、勘當かんとうえた悴くわだめ、金やらふ筈はずもあし。シ次郎殿花ひざろだいに賣うて下されぬか、シそんあら此金かなで、イマおれの何なんも、志らぬ田舎いなか

大盡じんおれが事ことあいつらが、息才おきで居る様ように、朝夕あさゆき祈のる此珠じゅ數すうの力ちからにも、叶かなぬ
ぬ物ものの金きんの錠鉄じやうてつが嶽だけが殺ねされたも、團右衛門だんえもんが業わざといへいへい喧嘩けんかの相人あいじん
へやつはり伴とも町人まちにんが人ひとを殺ねしてて、遅おそいかといか風かぜの前の燈火とうひ、爰ゑらふ
まいくまでおつたら、歎たんまほしまほしい死死を玄くつをらふと、夜よの目めも合あぬ因果いんげん
あ長生ながいき古來こらい稀まれある大盡客だいじんきゃく、そろばが可愛かはいけれどこそ、あつかましまい此厚このへ
鬢びん、何事なんごとも次郎吉殿じらきちどん、頭かしらにめんじて頼のますと、立上たのむれべ、そんあらきふあらきふお歸かへ
りあされますと、庭にわへ送おりの駕かの者もの、次郎殿じらきちどんさらば何事なんごとも、いへぬ色いろ
ある山吹色さんびきいろ、誠殘まことにして立歸たのむる親おやぢの情じやう、身みに玄くつめめ、人ひとを殺ねせし罪科つみかへ
遣おれぬ禮三らいさんが身みの覺悟かくご、奥おくの中居なかゐが走出お出だたふて
も、咄とつしが玄くつんでひかへて居た、禮三様らいさんさまからお前まへへ此文このひ、藤江様とうえいさまから頼のま
まれまれま、それくそとひらいて見るより是これが玄くつたりいつの間にまにあ玄くつや
つつたま、悦えばす事ことが有あり、やちつとの間まもかうして居られぬ、わ玄くつや北野きたの

屋へ居てくる間、錦様よ此様子戻つてから咄なま志よ、つい行てこふと岩川へ、悦びいさみ出て行錦の文を見るよりも、有にもあられず走出、忍ぶ禮三を見付しより、おまへへ聞へませぬ、何でわたしをぶり捨てる覺悟かくごの此云置といふ口おさへる打こそあれ、藤江とうこうへ三味線持あがら、こ錦さん誰ぞくるあらがらしてあきよど、座敷紛ざわぎらす三味たいこ、こやかましうて一つも咄なしがあらぬわいを、おつと心得すじかい身、合す調子ひらめきのいと志らべめぐらべ、それ錦さんよぶわいあ、ちやつと吹けすともし火のまざれにぬける禮三郎、外からびつまやり暇乞ひまごさはあれぬ思ひ胸おもひむねの中、闇くろの錦も諸共ぬけて出る氣を呑込藤江、二階から見る九平太が、鬼の目をぬくぐらがりにくいり戸ぐらり、ごお尋あさるへ二三軒びん西でござります、よふおいであされました。

第 七

町の名も鱗谷とて、長堀を少し南へ入口も間口もせばき裏がしや、かつて鶴屋の禮三郎と名前へ有れど外を家留主の隣の須賀市が見る目へあふて、かぐ鼻と聞耳立る門の口葬禮戻りの上下ため付我家へ歸る禮三郎、すが市様に苦勞く、お歸りあされましたか、きつう遅ござりましたあさればいあ他宗の葬禮といふ物の隙が入て悪い物外あれば行ぬけれど、家主の葬禮にさあがら病氣も遣れず、せう事あしよ行ましたぞりやそふと留主の内に誰も來れぬさせあんだか來た段でござりませぬ道頓堀の北野屋の者じやといふて、三四人の聲がして押入れ明る音、そこら内をもんざり返していあれましたが、ありやどうした事でござります、さういた事やら、あそこの奉公人が欠落いた迎げざから夫で丁を三度、わしがいた事の様に迷惑あ事でござんす、此奉公人めもそこにはいつてけつかるやら、いつそ爰へうせ上ると、是程わしも

案しぬと、むちやくちや腹に上下も引ちやあぐるやら引切やら見へぬ
座頭かづや^同もふ日くれそふ。内に又稽古人か待て居られふ。されお暇ナ
は志よ用が有あら何時成とお呼あされませと、我挨拶あいさつを志ほにして、と
ぼく隣となりへ立歸る跡に禮三がそつくりと、今いふ通り尋に來るから
内うちの首尾しらびよう出た物が、どうして今迄こぬ事と案しにくれる胸の闇うみい
とい物うき一ツ鉢無常わむじょうの餘所か、こちくと石と金との相性あいじょうが、あらば
火のふる火燧箱ひわく付木に付て行燈あんとうに、ともす火かけの明り窓、入口の戸も
まめぐと、又も案じる隣となりに、稽古けいこのねじめ高々と、うき名をあがす、堀ほり
江川流れによどむ捨小船すてこぶねつあがぬ縁えんは是非ぜいもなや、懸路けんろの鬼かたんば
やの妻に通ひのかねごとも、きのふひげふのあすか川アフ哥おとこハ古手屋八
郎兵衛ひょうや達たちの香具屋を戀の意趣おもじで切たといふが、又腹も立ふかい蝶よ
花よと樂しみ思ふた色を盜ぬまれてい、是を思へば錦木めも、夕べ内を

出あがら今においてこぬからひ外に心が、そふいふ根性共立らず親
にも身にもかへたのが、口惜いわい無念あわいねたみの、釤と立て、我
と身をさく鱗谷堺筋も半町も、錦が尋夜の道、濱邊も果し、長堀の人目を
包む頬かぶり、玄める門の戸打たゝき、卒示あがら禮三様の所内方じ
やでざりませぬかと尋る聲の錦木かと出んとせしか誰じやく、そん
あ人へこちらじやごんせぬ、そこぞ脇を尋さつ玄やれ、そふいの玄やん
すれ禮三様じやあいかいあ、わしじやわしじやわいあ、ちやつと明て
下さんせ、何じや、わしじや、ぞふて鷺の鷹か爪の長い猿松め、猶め畜生
め、おのれりく、にくやあ、今宵の内に、やつきりくく、切殺し浮世
の夢を、鮫鞆の、鯉口くつろげ落し措、早初夜の鐘指折て、明てくれん
のかいあ、人が見付りや悪いわいあ、禮三様、何が腹が立ぞいあく、口
舌所じやでざんすまい、タベの場の足代屋の、出られぬ内を漸と藤江様

の情にて、出事へ出てもお前の内、爰共志らずうろくと尋る内に夜へ
明る、とふも仕様の中橋の志るべの方にけふの日の暮るをあんせと待
兼て尋迷ふて來た物を、聞へぬわいあ禮三様思ふに違ふお詞といふ間
も疑ひぐらりとひらき開、そんあ事とい志らず、夕べ約束志た通、二人
一所に死る覺悟で、先戻つて待て居れどわがみがおじやらず、内々へ二
度三度家さがしに來る上へ欠落志たに違ひあいが、今迄爰へこねか
られざりで外に心が有て、おれをすつぽりやつたあと、腹が、立て恨んで
居たが、今のを聞いて、疑ひ晴たかへ、其心底を聞上へサツ上りやくと
入口の戸をひつ志やりと差向ひシテ、今いやつた中心にかゝる、其志る
べの方から若知り志よまいかの、イエ、そりや氣遣ひして下さんすあよ
し又そこから知てから、あす迄待ぬわたしが命、お前の覺悟へとふそい
ど、もたれかゝりし女郎花涙へ膝に置露のいつれはかあく見へにけ

り、何の夫よ念押事岩川や千羽川殿が様と心を盡して下さるれど、タ
ベわがみにいふ通り鉄が嶽を殺したる禮三すりやをふで生て居られ
ぬ身の上アとかく心にかゝるゝ親父様の事斗夫で吉兵衛殿や岩川へ
頼の書置爰で死でハ恥の上ハシり、大坂の町をはなれて濱の寺迄行て死
ふ用意がよくばアおじやと手を取バ押留ア待て下さんせ、ア待といや
るゝ心でも變カハつたか何の心が變カハりませふ、さらくそみでハあけれ共、お
前と夫婦に成たいと思ふを勧の樂しみよ、暑したかいもあき命せめて
今宵の半時を千年も添し心みてほんの男じや女房じやと、飯焚真似や
水くむ真似世帶するまねして死だら未來の迷ひに有まいとさすか女
のくぞくくといふも涙にくれあぬの、錦あやあす諸袖みいとゝ色
そふ計ありア尤々、そふ思やるさらわしも俱々手傳程に、飯玄かけて焚
てたも、幸けふゝ親父様の誕生日是迄ハ不孝の仕續せめて女夫が煮焚ナガシ

玄て、かげの膳あと居るあら夫が此世のか暇乞と、涙隠して押入の米取出しあてかへり、洗ふすへさへ、おらげのよね、志ほく、おつるへ志りえとに流したる白水へ、顔に艶とる白粉の、とびて涙のかしき水夫へもやす釜の下、詞、一旦那さん飯もる物が有かいあ、あの人のせへし、まだ出来もせぬ内から、押入に茶漬茶碗が一つ有アといふまゝ、取出す、錦摸様の染付も、詞、きたあ、ヨリヤマ、一ツ洗ふたまゝ、志やいあ、ほんにやもめといふ者ハあたじだらくあといふて見る、心がほんの女夫事シレまゝがこげくさいぞ、ヘ、合点もへ、枕を消す、此身も消る身といへば、錦も顔見合せ又も、涙にむせびしが、我あがら愚痴事シラ、あ、いげのさめぬ内、釜から直にもつてたもと机の上に白紙を、しいて備へる影の膳、誕生日の祝義、めでたふ上つて下さりませ、親父様母人様、是迄一日お心休める事もあく、親に先立不孝者、其上ろくあ死も致しませぬ憎いやつと思召、

必泣て下さりますあ、此上に歎をかけ、お身のいたみにあらふかと、夫が悲しうござりますと、夫が歎べ、妻ハ猶、わしも在所に一人のとさん年寄といひ目へ見へず、去年祭に見へた時も、ねり物に出るわたしが、髪切たと聞てさへ、あられぬ姿と泣しやんした其時、無事で居りやこそ、此様よ、おまめを顔を見まするど、いさめた私が先立て、及よかゝり死だ事、在所へしれたら、嘸や嘸歎の程が思ひれて、悲しいわいのと伏まろふ心の内ぞやるせあきせめて名残に一筆と、硯に向ひする墨の、こいとや誰も招かねど、まだ盡果ぬ親子の縁、錦が親の手を引てそろく、北野屋七兵衛か戸をはとくと打たゝき、七兵衛でござりますちよつと明さしやつて下さりませといふ聲聞て二人の悔り、そりや親方じやぞふせうぞ、まあ爰へあとはいつて居やと、巨燐へ無理に押入の、蒲團打させ禮三郎、俄に作る寝ほれ聲、誰じやモウ寝ました、イ七兵衛でござります、お

無心あがらちよつとお明あされて下さりませど、いふましや共ふせう
べ、戸口明れべ、^開是ひもふか休あされましたか、誰ぞと思へば七兵
衛殿、夜よあか見へたのべ定て錦木が、やく、今夜ハ揚びざります
コレ爰よ居られますハ錦木が親父殿で、やく、何も驚あされます事ハ、此親
父殿ハ目が見へませぬ其見へぬ目をして、娘が顔が見たいといふて日
の暮くれよ見へましたれど、錦木ハ揚で内よ居す、折わるう今夜ハ泊人泊人
が大勢有て、此親父殿を寐さす所がござりませぬ、夫で近比は無心様あが
ら、今夜一よさをふぞ親父殿を、お前の内よ寐さして貰もらひませうと存し、夫
夫で連てさんしましたと、聞ていつとへ思へ共そなへけぞられまいとそし
らぬ顔おもて、やすい事こと幾日成共、とめて下さりますか、やく、嬉しや、やく、親仁
殿上らしやれおなづかあふあいとばくしよまじまじ手を引ておんせう、
親方様段々お慮外様でござりますが、おた様じや存じませぬが歎さ

しゃつて、アイ今晚はんのふやかましうござりましよどおちくする、又禮三郎、^{アヤシム}其様に氣をはらずとゆるらとしてござりませ、ハイいかぬお世話さまでああたへずつとお心安い程にゆるりと思ふてハイ、いかぬお世話さまでござりまする、アナンケイやア然らハ私ハモ歸りは志よ、ほ面倒あがらふ頼ナ上ます、長居玄たらをふやら重井筒の巨罐の段が、^{カガハル}アヤ禮三様ちよつとくあれ迄の目み掛りませうと、伴ひ表へ立出る、^{ミア}お前にお悦バせます事が有、折錦が立金ハ受取ましてござります、^{ミア}そりやアセコから、^{ミア}岩川殿から受取て、濟で有事ハ玄らず、夕べから見へぬ錦夫でこれ、此年季證文をお前へ渡さふと思ふて持て參りました、立金が濟だから、^{ミア}ふせふと、お前方の心の儘じや程又、^{ミア}死いでも濟事あら、といふてとめて、^{ミア}鉄の綱の中へ入ても、死神といふ物が付てハ人間の力又や及ばぬわしも北野七兵衛といひれて、島の内で顔の賣た者、人の命を取とめ

る事あら、譬立金取いでも、奉公人よ涙もかけぬ恩にもさせぬ、かの親仁殿、爰へ連て來たの計へ恩にさせねば、目の見へぬ人が、うろつかまやるのを見て、いがお氣のつよい死神でも、思ひどまらにや成まい、ナ必々禮三様、是いかふべつかりみ、ヤもふふ暇ゆきナます、ごく親仁殿、いふますぞや、親方様か歸りあされますか、そんあらナ、夜の内でも娘か歸りましたら、憚あがら玄らせあされて、一時あと早ふ顔が見たふござります、そりや尤じや、戻り次第玄らせませう、禮三様、早ふる休やすあされませと、情を残す情の商賣切、はあれよき親方よ別れて、禮三も内に入、其間も待ず蒲團押退よしのけ飛と出るを禮三がどゝめ、逢てい悪い仕形しがたと身なり、蒲團を口に押當よしのけ、泣聲隠す心つかひ、こあたへ何の氣も付ず、ヤ旦那様、何ぞ進ぜませうか、ナ何時でございよ、さればもふ四ツ半に成ませうか、遠道を歩いて定てお草臥くたぶれ寝所をして進せませう、ナ

やくは勿^よ脉^め、あい構^かへ玄^{アキ}やつて下さります、遠道を探もふて參ります
す、娘に逢ふと思ふ樂^{たの}しみ嬉^{うれ}しうて、ねた迎中^{アツコウ}と目もあふこつち
やござりませぬ、ヤウもふ何時でござりませうや、今夜^{ナシ}のむしやうに夜
が長い、早く夜が明てほしい、ちやつと逢たい、くと今宵限^{ヒヨウカギ}りの命共
玄^{アキ}らず明るを待兼^{アシタマ}る、親の心ぞ哀^{かな}る、錦^{アラシ}正^{アラシ}肺^{アラシ}あき内^{アキ}も書残したる硯^{スミ}
箱^{ボク}筆取上^{アゲ}れで、いとゝ猶^シ涙^リにむせぶ泣聲^{クク}を、隠^{カカ}す禮三^{アマニ}かせき拂^{ハグ}ひ、^ア親
仁様^{アシナ}袖^{アシナ}のふり合せも他生^{アタシヨ}の、縁^{アシナ}とやらで、こうして若い者のお年寄^{アシナ}をと
めますれば、わたしなもう親と思ふております程^{アシナ}、お前も子の所へ來
たと思ふて心安ふあされて下さりませ、是^ア勿^よ脉^め、あい事^{アシナ}お玄^{アキ}やまし
て下さります、お前様方^{アシナ}に其様に結構^{アシナ}よいられる親仁めじやございま
せぬ、在所^{アシナ}者へ目^{アシナ}見へず、玄^{アキ}たが今日を喰兼^{アシナ}致しませぬ、其喰兼^{アキ}ぬも
娘が影^{アシナ}聞^{アシナ}玄^{アキ}やつて下さりませ、十年計跡迄^{アシナ}長柄^{アシナ}村でやもかうもし

た百姓でござりましたが、ふつと目を煩ひまして、身上有切打込で、どう
／＼盲に成て、遂方にくれて居ました所を、今北野やにおります姉が、新
町へ勤奉公に参てくれまして、其給銀を庄屋殿へ預月々の利足を取て、
夫で私が樂々とくられる様に成ました。ほんにあの様あ孝行あ娘ハ世
界中よハ有まいと思ひ出す度にハ旦那様涙がこぼれて嬉しうござり
ます、夫で一日成と早ふ勤を引したいと存じましても、目へ見へず錢設
のすべのしらす、思ひ付て去年からあんな取を致します。コヤ私が身の冥
加、是も娘が顔のよびれる事じやと思ふて、あれよハ隠しております。ヤ
ほんにちつと肩もんで上ましよかい、イそりや添ふござりますが、そん
ありや勞苦勞あがら肩も此手を、コレ此手をお前のお手でじつと握つ
て下さりませ、と錦木が手を持添て、出せハコあたも指寄で、お手が痛
すか、お安い事揉で上ませう共、お手を、相らかあ尋常あ丁を女の

様お手じや程又の親仁様、何と人といふ物の何時知ず、老少不定
とやまずれば、かういふ私が明日死のやら知ぬ命、若死だら、是が此世の
暇乞にも成ませふ程に、手先をじつと、旦那様にんげある事いりしやり
ますれいの、其様もおつしやりますと、心細ふて成こつちやござりませぬ、
玄たい此間ハ夢見が悪ふて案じております上、大坂の茶臼山で心中が
有た。太左衛門橋でハ切たのかしこでハ突たのと、聞度々に胸がひや
く、若姉めでハあいかからぬと、それで案じて参りましたが、親方様の
まめあるふつ玄やるので、嬉しやと落付てハおりますけれど、今おつ
玄やる老少不定、ひよつと姉が煩ふて、わたし先へ死だら、此親ハどう
せうどおもひますれば俄に悲しう成てきて、浮敷されて下さりませど、
涙をぬぐふ塵紙の薄き親子の契りかと、物いひたさと悲しさに、錦の胸
もはりさく思ひ、浦團にくひ付、玄がみ付前後、涙に伏ゑづむ心ぞ思ひや

られたり、早丑満をつげの鐘へつと禮三が氣もそぞろ、書置ひととに手
べじかく、や親仁様私おのへ書約束ふりやくそくがござります故、ふけましたけれど、ちよ
つと近所迄まことにいてさんじます程す、もし留主るすのうち京飛脚ひきやくが來ましたら
此狀渡して下さりませといふ中錦を引立れど、さらみ正財ただざい、立足たてもあらず
く、禮三にいざあれ、出る戸口は死出の門、是が親子の別れの涙思へ
バ胸むねみたもち兼わつと斗たたかみ泣聲の、血筋けいきんの膽はづきよこたへてや今いまのへ體たい
姉あねが聲こゑ娘むすめよ、そこそ居ゐるぞいやい、親方おとこの詞ことといひさつきみからからの様
子こと云い、何で親おとこよ隱かくれるのじや、姉あねよくくと立上たつれど、方角かたかどもあきめ
あし鳥あしどりかべよばつたり行燈あんどへぐらり、二人も探さり大坂おほさかの町まちへ生死しほう
甥むすめ筋すじ涙なみだあがらずあがらず、たゞり行ゆ

第八道行闇路まぢうじゆの町續まちつづき

夜あらしや、吹風さむく、身にぞゑむ、往來、まばらの軒のつま、結びとめた
る下がへの、ぬしよ女房と只一夜、それが未來のはれ小袖綾も錦がうら
わかき二世と契りし禮三郎、今宵限りの命ぞと書残したるもしは草は
んに誓紙の數とも、手を取かへし行先へ、あの世此世の、堺筋、あゆめど「道
もはかせらぬ、跡よへ親のかれのこる老木の老の道さまに、順慶町も空
ひとやわじとお前が憂事のあだあ契りを、米屋町本町筋の軒ふかく、思
ひ初たる中あれば煙共せず諸共に、うつまばあせか安土町男も同じ二
世三世、生れかひりて又爰へ親の便を備後町永き未來をかへら町、斯成
果る我ゝいつの因果を身ようけてともにうき目に淡路町悔むへぐ
ちと平野町どへ思へ共すつる身をとがめてはゆる犬の聲道修町筋過
行ペ、早眞夜半の月代の、空恐ろしく行あやむ、玄バシヘ爰よ伏見町高麗
橋の果迄も、ともにぞつれん去あがら、所詮此身へ人殺し、一所に死れバ

親^よへ不孝^{ふこう}の罪^{みる}も恐ろしう、そあたへ生てあき跡^{あきあと}を頼むと斗くもり聲
錦^{にしき}の涙^{なみだ}の顔^{おほ}を上^う生る共死^{ともし}る共二人一所^{ひとしょ}と云^いかへし今^{いま}のつらさを、あの
世^よみて、閨^{みやこ}の仙^{せん}しの樂^{らく}しみと^と思^{おも}ふて居る^ゐをうよくあ、大事^{おほ}のくと、
様^{よう}にかへていとしいお前の事^{こと}わすれうとすれぞ猶^{まことに}さらに思^{おも}ひ切^きにと
切れぬ^ぬをうした結^{むすび}ぶの、神^{かみ}さんがむすべ玄^{くろ}やんした綠^{みどり}じややらいふ
にいられぬかしそりの、つがひはあれぬ中^{なか}じやものおまへと別れてそ
もやそも、何^{なん}とあがらへ居られふぞ、ともに殺^{ころ}して下さんせとすがり付
たる恨^{うらみ}泣^{なみだ}、道理^{ぢのと}くと撫^{なで}さする、顔^{おほ}へ涙^{なみだ}の横^よ志^{しお}ぶき、懸故^{けんご}ふる露^{しづめ}時雨^{じご}、爰^ゑ
やかしこに、立^たとまる浮世^{うきよ}小路^{こうじ}の縁^{えり}うすく水^{みず}のあれれや大川^{おほ}川^かをこへて
いそくへ後の世^{よの}の、縁^{えり}をいのりて寺町^{てらまち}や今^{いま}を誠^{まこと}のめうと池人^{いけひと}目^めつゝみ
のやうくとはまのてらにそつきにける、

ア錦覺悟のよいかと抜放し既にさいごと見へける迄から、殿右衛門九平太と繩をかけて千羽川、岩川諸共かけ来る所々、澤田兩助淨久お才を伴ひ來また生て居てくれたかと親の悦び兩助も、團右衛門が白狀にてきやつらが悪事明白、鉄が嶽の九平太と馴合て、殿のお金を盜だ盜賊禮三に科あき御政道と聞て岩川、千羽川、次郎吉、吉兵衛世話がい有て重疊、何かに付て兩助様のおかげく、猶此上の御本妻の、お才様、お妾の錦木様、成程く先四人引立よと、兩助がさいべいよて家に羽を伸鶴屋の禮三、池田の關取、天まの關取千兩く二職其名を、難波に上にけり

明和四年亥八月四日

關取千兩職 終

川氏十八

八十氏川

柳塙亭寅彦

佐殿院宣を得て、北條時政をたのみ平家追討の軍勢を催し玉ふよし、風聞隠れもあく、早や都も聞えたり、洛東吉田の片邊りよ、あちき無き世を送る。佐々木四郎高綱の伯母なる人よ、衣食を給せられ、破築垣の真葛を吹く、秋風も朝より染むまで物の憐れを知初めし剛の者が視の露、乾くひまもあかりしよ、源氏再興の時節來りて、佐殿義兵を擧げ玉ふといへ嬉しき事を聞くものかあと、踊上りて打喜び、いかよ伯母御前、我父なる源三秀義は、故六條判官殿と父子の義を結び、代々一門の交誼をなしたるよ、去る平治の亂れより、平家の爲み世を狹められ、源氏の家人こじかしこよ潜む中よ、在下等兄弟五人八方よ離散して、

八千十 川氏

太郎定綱ひさだつなは下野の國宇都宮うつのみやより、次郎經高じらきこうは相撲の波多野はたのより、三郎盛綱さかだつなと五郎義清よしきよも、同國うつくより別れ住み、あはれ左典廄の公達夥多おほひだりある中なか、一人たりとも白旗を翻へし、會稽の辱はずを雪そよがんとし玉たま御方ごおうあらば、第一だいいち驅參けせさんに驕奢きょうしやよ募つるる平家ひらけの一族ぞく馬蹄ばだいみかけて、蹂躪じゆりり吳ごれんづと、年頃どき日頃心こころを惱なましひひ、兄弟いふたりいつれも同じ事ことみて、海山かいざんこそ隔はなてたれ、膽きもを嘗め薪なきよ臥ふすの思おもひ露つゆ違たがふべくもひひす、佐殿さでん謀叛ぼはんと聞くと、共とも、次郎せりょうも三郎さぶらうも味方みわがたよ參さんること、鏡かがみよ懸かかりて見るが如ごとくなれば、在下ざいげも急いそぎ關東くわんとうよ下向げこうし、功名こうめいせべやと存そんじし、か暇玉かまどだまれるべしと云いふ、伯母はくめ打うち聞きて膝ひざの進すすむを覺おぼえず、四郎よしらうよ善よき耳みみを聞きせ玉たまひて、老後はんこうの本懷ほんがい此上このうへへ侍まつらず、早々さくさく下向げこうし玉たまべし、世よが世よみてあるならば、愛度めでたき門出かみでの餞別はんべつよ、馬ばを引ひせ物ものの具ぐも參さんらすべしよ、津生つじゅうふ詰づしき住居すみの襪は襪はるせてふ虫むしの音おとよ、裏うら恥はずかしき心地こゝをする、荒蕪あらびの古いき

川氏半八

衣一つ、年老たれば目も疎くて、身が裾の綻びも、其儘よ捨置なれば、
佐殿への見参よ、肩身の狭さ如何ばかりぞ、今目を瞑れば在りくと
眼前よ現るし、大將軍の陣營よ、着到の大名小名思ひくの直衣よ、卯
の花緘し、小櫻緘し、白星の兜郎黨よ持せ、揉鳥帽子引立て、武者振繕ふ
其中みど跡言差してつれぐと、高綱の姿打目成り、涙浮べて背向と
なれば、いやとよ伯母は前柄糸千切れ鞄剥たる業物の一腰こそ、高綱
が爲より、札よき物の具みてひなれど、傍らの太刀引寄せ、高らかよ打
笑ふ、伯母心を慰まして微笑みつゝ申しけるゝ兄弟五人あれども、幼
稚かりし頃より、最も妾よ親しかりしゝほ身なり膝の上よ搔乗せて、
懷の乳房を探られ、肩よ抱きて髪の毛をむしられつる事もあり、六七
歳よ成玉ひてい竹の小弓よ猿矯の矢、扱ひ馬よ乗る道あと習ひ玉ふ
そ側へよありて見たりしかば、早く成人して親よも兄よも勝れ玉へ

川 氏 十 八

と願ひし心れ今も變らず穴賤後れを取りて平家の武士よ笑へれ玉
ふなとて瓶子土器把來り出陣を祝しけり高綱押頂きて酒汲交し卒
や東下らんとて旅の調度取揃ゆれど世よあき身なれペ馬もなし
唯脛巾み編笠着て太刀を横たへ草鞋の紐引締つゝ伯母に前去らば
よてし軍といふ家を出る其日より好き敵と引組んで死なんとぞ
そ存すれ身を全うして再び見參入るべしとれ思ひも寄りひはず
陣歿する其入の名を竹帛よ垂れ千載よも傳ふべけれど三輪ぐみて
老屈む伯母は前へ何を便よ餘命を送り玉ふべき痛へしくこそひら
へと思入りて云ひければ伯母の頭を打振りて花長闊よ散る春の晨
月隈もなき秋の夕又時雨よも野分よも憂より馴れたる老の身を女
めしくも案じ玉ふな我の亭をうむ隙よはへ千手經を誦してほ身を
護り侍るべし阿遮一睨の窓の前よ鬼神手を束ねて降を乞ひ多齡

川氏八十

三啜の床の上より、魔軍頭を振て、恐れをなすとかや、況して觀音無畏の利益、千手神呪の効驗をや、心安く在せとて、破几帳のうちに入り、再び面を合せんともせず、遠がは四郎が伯母なりけり、名残盡きじと思し玉ひて、几帳の蔭よ隠れたるゝ手を取りて泣玉ふよりも、武士の腹脇を搔むしりひぢや、襦襟の裡より、鍾愛せられし報恩より、在下が功名の物語り、京童よ傳へさせて、御耳よ入れ奉らんと、千種の露を踏しだき、我家を跡よ振返れば、黒木の柱よ取縋りて、伸上りたるゝ伯母の影あり。

英勇涙なきよ非ず、檐端よ高き松一木、後凋の探を愛て、此年頃の友としたれば、流石よ名残り惜しまれて、壇生の小家を見返りく、打消れて立出たれば、思ひしよりの道歩取らで、其夜の守山の驛路よ宿り、思寝の夢よ都を攻めて、平家を一戦よ追落し、明れば早く立て、野州河原

八千氏川

六
又出ぬ、あから引く朝日影尾花の末の白露よ、紅ゐの色添へて、旅人赤だ見えざるよ、草鞍置たる田舎馬、朝霧の間み嘶きつゝ、むくつけき馬士よ曳れて、早や側り近く進寄れり、高綱斯くと見て聲打懸け、和殿にいづこの人ぞと問へば、燧袋搔探りて横咬へせし古煙管よ、火を移しつゝ打笑みて、是の栗田の者なるが蒲生の八日市へ參ると答ふ、高綱押返し、名ひいかよと尋ねれば、馬士怪し氣よ打目成りて、左右なく打明さず、尙つよくと問ひければ、詮方な氣よ頷きて、紀介とぞ名乗りける、折の紀介と呼れ玉ふか、去らば、紀介殿よ、此河を渡らんほど御邊の馬を貸し玉はずや、紀介答へて叶ひひまじ道遙かなる八日市より、重荷を負せて歸らんすれば、我さへ勞りて騎らぬものを、何とて人よ貸すべきぞ、日長けなべ里の總角、打群れて泳ぐ程なる、秋の初めの事なれば、彼方の林より、蟬の聲さへ聞えて、水の冷たきと云ふもあら

川氏八十

ねば只渡り玉へと辞ひぬ否ひらゝ貸し玉へ悦びの思當るべしと云
ひければ紀介押問答も負て是非なく貸してけり高綱馬も打乗り早
や我物ぞと思ひつゝ手綱操縦りさつと乗入れ膝ばかりなる水を蹴
立て彼方の岸も打渡せば紀介遠く後れて衣の裾をまくり上げ日も
黒みたる毛膚さへ藍の如く見ゆるまで溝く澄める河を渡りて蛇籠
の上も腰打掛け濡たる足を拭ふ間も高綱馬を急がせて二三町餘も
隔たりたり紀介斯くと知りて打腹立ち馬を返せ下り玉へ阿一重渡さ
ん程こそ辭み兼て貸しもしたれ何時までか乗り玉ふと背後より呼
掛つゝ後れじと追行くを高綱ハ空耳潰し鞭を打てぞ歩ませたる紀
介やう／＼追縋りて喘ぎ／＼聲振立て早や下り玉へと催促すれば
唯應と答ふるのみ此所まで下りやせんか彼所まで返さんかと懸す
れぬ事を憑み廻るども無く行くとも無く篠原堤よりけり紀介馬

川氏十

を請わびて、今いは早や詮方なし、馬盜人と料ばんと云ふ、高綱聞いて足搔を留め、紀介殿馬を返すべし、近く渡りひらへど、呼寄せながら四邊を見れば、霧深く立籠て、今渡りし野州河へ、模糊として其所ども分かず、殊々人さへ無りければ、高綱折よしと打領づき、三尺の秋水抜手も見せず、紀介が太腹二刀刺通し、側らの溝み打入れたるまゝ、一轍當て宙を飛し、夜を日よ繼いで息をも吻かず、關東よ走下りぬ、

牡鹿の聲よ秋寂びて、紅葉散布く茅葺家根、野分よ脆き落栗み、覓の水も濁むめり、栗田の里の月満み、未だ寐ぬ人を風よ知る、餘所の砧み打合せて、からりこうりと拍子取る、紀介の嫁若草が撃つ手も撓く躬へ瘦て、頬よこぼるし、束髪蜘蛛の圍纏ふ花よ似て、あはれよも亦色深し、いかよ憂みや堪兼けん太き息を漏しつゝ、我夫太郎次殿の心無よ、舅の討れ玉ひし傾へ、仇を討で置くべきと、狂ひ罵りて在せしが父、

川氏十

を失あひつる者こそ、關東第一の剛の者佐々木四郎高綱あれと、風聞
み聞怖して思絶え玉ひぬるゝ口惜しき事の限りなり、妾男より生を得
なべ、斯く阿容々々と見過すまじと、無念の涙はらゝと、降そぐ
ぞ健氣なる太郎次妻の歎きへ思へで、杉葉立たる又六が門守る犬の
側らよ、醉られて打倒れ、夢驚かす夜嵐よ身慄ひしつゝ、其所を立去り、
野面よ秋の錦を纏る男へし女郎花むさゝと踏荒し、醉歩蹣跚とし
て立歸り、若草の未だ寐玉ひぬか、夜の更たるよ門よ出て、砧を打ひ要
なき事など、溢るゝまでよ打笑へば、若草答へて、ほ身歸らせ玉ひなべ、
やしたき事ありて、今まで侍焦れ侍りぬと云ふ、やしたきどい何事よ
や、醉の醒めたる頃、打寛ぎて聞くべしとて、内の方へ入らんとするを、
若草引留めて涙を流し、父を討れ玉ひたる無念さを思しなべ、湯水も
咽喉を下るべしと覺え侍らず、況してや酒よ醉ひ玉ふべき謂れな

川氏十八

一きよ去りとてハ淺猿しき御心かな假令四郎もせよ高綱もせよ、
虎と見て石よ立つ矢もありとこそ聞け欺し寄りても一太刀怨み人
の道を立て玉へ御身も同じ武士ならば尋常の勝負せでハ末代の恥
なれど馬追ふ賤の漢より式も作法も待るまじ唯亡き人の修羅の妄
執晴し玉れ事足るべしと雄々しくも諫むれべ太郎次醉ひも醒る
まで打惜れて太息つき左ばかりの事知らぬみあらぬと悲しきかな
太郎次ハ性得て力弱く總角の頃より友達と相撲取りても勝たる例
し一度も無し去れど父を失なはれて無念骨髓と徹し仇敵と狃ふ者、
若し百姓商人ならん又い喰付ても怨まばやと思ひつれど有るが中
よりも猛者と聞えし源氏の武士みてハ力及ばず却て仇敵と討るより、
必定の事あれば御身跡よ残りて如何ばかり歎きやすらんと思遣ら
れて猶豫ふなり酒飲むを咎め玉へど醉ふたる間のみ憂きを忘れて、

八十氏川

暫しの心も晴るものと打泣きて怨じけり、若草呆れて返すべき
辭を知らず、つくぐと思ひけるにほろとを掛る雉子へ更なり、今鳴
く鹿の聲を聞ても、妹脊の情よ羈絆さるゝを道理ならずとい思はね
ど、妾の爲み心後れて不孝の人となり玉へい此身如何なる面目あり
て、舅の御位牌よ事づくべき死して夫の心を勵し、孝貞共よ完からん
より愁ひ生を貪りて快よからぬ年月を送るよりも遙かに勝れり、金
玉となつて碎けよと昔しの人の誨へしを我身の上と思知りて、今
宵一夜も過されじと覺悟早く定まりけれど、打明さば事敗れんと色
め目よだも現さず、兎も角も打臥し玉へ言ふべき事も聞くべき事も、又
明日の朝こそと打連れ奥に入れば、風おのづから折戸を鎖し、半輪
の月皎をして萩の葉末よ玉踊れり、

川氏十八

の前より手を打合せ、繰返しく彌陀の名號を唱へつゝ、來迎の金蓮より貴きも賤きも俱よ乗じ、弘誓の船筏より、富るも貧きも渡し玉ふと聞けば憑あり、來世の佛果を得させ玉へど、念じ果て側へより、塵芥も埋もれたる古硯取出し、懷紙の皺を伸して、書殘す筆の立途も文の詞も美しきに、馬追ふ男の妻よ似ず、駿馬痴漢を乗せて走るといへ、寔や若草が事なりけり、卒とて和家を迷ひ出で、程近き流れの下よ悄然として廻り行き、首を回らして四邊を見れば、風蕭々として渡頭の柳を梳づり、水潺湲として斷崖の苔を洗ふ、若草淵ある所を尋ねて、惡びたる色もなく、入水して失せよける、切てゝ此所を最期の地と、後よ知らせ玉へとて、着馴れたる袷衣を、柳の枝よ打掛つゝ、残し留めてありければ、太郎次夜明けて後斯くと知り、紀念の袖を抱き占め、蹉跎して歎きけるよ、袂より遺書の文轉び出たり、扱ひ要こそあらんすれど、今ひ

八十氏川

なかく愛妻しき世み亡妻が筆の跡、經文などと讀むが如く捧持て
抜き見れば、柳の枝も雪折れぬきぞとよ、佐々木殿鬼神なりとも、一
念をもて一太刀刺し玉へ、縱し反討るゝとも、阿容々々生て在すと増
して、黄泉の父君又言譯あり、豫てハ百年の後を見果参らせんと願ひ
侍りしかど御心を屬まさんとて、逆縁ながら我夫の御回向、受べき身
とれなり侍り憐れと思し玉はんみ、疾く佐々木殿を怨みたま
へかし、穴賢とぞ書いたりける、左しも與性の太郎次あれども、最愛の
妻を失ふひて、物狂はしきまで無念と覺え、渦巻く水を屹と見遣りて、
心安かれ佐々木殿を討取つて見すべきと彌陀佛々々々、
毒永の秋平家都を開き、一門西海と落行けれど、木曾殿北國の軍兵數
万騎を卒いて上洛し、財を掠め人を屠るなど、狼籍至らぬ隈も無れば、
頼朝奇怪と思し、早く追討あるべしとて、蒲冠者範頼、九郎御曹子義經

を追手搦手の大將軍とし、宇治勢多へ向ひせ玉ふ。去桂よ義經ひ其勢二万五千餘騎、平等院の北の方富家の渡りよ打寄せて、向ひの岸を見給へば、木曾の軍勢宇治橋の中の間、三間ばかり断切りつゝ垣櫛搔きて、櫛よ構へ渡すべき所より乱抗逆茂木隙間もなく、大綱小綱を流し懸け、要害堅固よ陣を取りれり、比しも元暦元年春の初めの事なれば、雪解よ太く水増して、逆巻く浪音恐ろしく、虹の橋桁危うければ打渡すべきやうもなく、兩軍睨み合ふて扣へける。

ばかりの煙り風よ靡きて斜めよ棚引く陣所の幕張り、矢筈の紋を染たるべ、梶原源太と知るものから、月よ嘶く馬の聲こそ、鎌倉殿より賜りたる磨墨と覺えたれ、源太景季の敷皮よむづと座し、軍扇佩盾よ押立てし、明日の先陣如何あるべき、我義よ生喰を賜はれど、鎌倉殿よ請うせしよ、生喰の四郎高綱よ取られ、口惜しき事限りなし、其怨みを返さ

川氏十

んより我真先み川を渡して高綱と眞明せ、何の面目ありて生喰み打乗たると笑はするの外に無し去ても淺瀬を知ねば此事難儀なるべしと案じ詫てぞ居たりける此時誰かあるらん幕の裾打かしげて忍寄る曲者ありけり源太遙早く見て聲高ひ誰ぞと問へ周章感ひて蹲踞より大地と額づきてやけるゝこれ御手勢の雜兵と太郎次と呼ばれひ者あり、窃かゝ言上すべき事ありて虎威を犯し奉つりぬ御許しあるべうもやど恐るゝ氣色を伺へば源太うなづき疾くゝ言へどありけるほど太郎次重ねて殿の此度の合戦と名馬磨墨を賜り又佐々木殿生喰を拜領しゆれば宇治川の先陣こそ御兩方が一期の晴業なれ扱も由々しき大事かなと味方の風聞隠れもいはず太郎次無下の下人よりへど佐々木殿を怨める筋ありて斯く雜兵と紛れ入り附狙ひて日を送れど天晴れ凜々しき武者振ふ心後れ刀の柄

川氏干八

を握るのみみて、未だ本望を得遂げしらず、此上へ他の力を借り、餘所ながら怨を返さばやど、思極めし折柄、屈竟の先陣争ひ、太郎次幸ひにも此ほどりよ人とあり、後より栗田へ移りたれば、淺瀬をば能く知つたり、殿より、殿より教え参らせて、佐々木殿より恥搔せ、胸の炎焰を消さばやど、殿より近附き奉つりしなり、佐々木殿打負て、兩軍の物笑ひとなり、腹搔切つて失せもせば、太郎次が本懐此上やしべきと、思入りてゆしける、能くこそ心附たれ、早々淺瀬を教えよと云へば、さんひ此河へ、近江の湖水の下流なれば、今初めて洪水したるより侍らず、春立つ日影の微ひみて四方の谷川の氷解け、比良の高根の雪消えて、水のかさ増るとも、減する事しまじ、唯櫛の小島が崎のみ遠浅と覺えてし、高倉宮御謀叛の御時よりも、足利又太郎忠綱此所を渡し、勝利を得たりと承まはる、勤めて後れさせ玉ふあど云へば、源太斜めならず打喜び、明日の勧き見

八十氏川

よかしと云ひて高らかに打笑ひければ太郎次憑みある心地して嬉
し氣と退出でぬ。

兩軍既に矢合せあり、太郎次り平院の松の木蔭に隠れ居て、今も
梶原殿馬を打入れ玉ふらん。若し御運拙なくして佐々木殿一陣たら
ば、我命も夫までぞ何を憑みよ存らふべきと片睡を呑んで見てある
所よ、小島崎より武者一騎、泥障蹴立て駆出たり、木蘭地の直衣よ黒革
縫の鎧着で、三枚甲の緒を締め、滋藤の弓の具中取て、廿四差したる小
中黒の矢を筈高よ負ひ、太く逞ましき名馬よ、黒塗の鞍置いてゆたか
よ打騎つたる、紛ふ方も無き源太景季なり、扱へ我殿先陣よ極まれ
り、佐々木殿が皺面、今目の前よ見ゆるほど踊上りて喜ぶ間もなく、佐
木四郎高綱褐の直衣よ、小櫻を黄よ返したる鎧着て、鉄形打たる兜
を頂き、笛藤の弓廿四差したる石打の征矢を負ひ、彼生喰よ黄覆輪の

川氏十八

鞍置き後れじものと走來りて馬の平首押並べ、二騎諸共よざんぶく
 と宇治の川瀬よ打入れたり、太郎次胸とやろき、斯てハ勝負いかゞや
 と掌よ汗握りて居ける程よ、兩勇がえい／＼聲、早や聞えずなるまで、
 間ひ遠く隔りけるが霞のひまよも夫と知る兜の八幡坐きらめかせ、
 雨霞と射かくる矢を打拂ひ／＼先を爭ふ勵さり、いづれ魯とも見え
 ざりける源太ハ如何したりけん、馬を止めて鎧踏張り、弓の弦を口よ
 咬へ、腹帶解きて引誂め／＼締めける間よ、高綱さつと乗勝て、二段ば
 かり先立たり、源太安からずと思ふ氣色みて、是も打浸して渡しけれ
 ど、高綱ハ屈竟の逸物よ騎りたれば、淵瀬とも云ずざんざめかし、早く
 も向ふの岸へ打上りぬ、太郎次遠目よ斯くと見て、口惜しや佐々木殿
 よ、一陣の名乗を上られけるよ、今ハ頼みの綱切れて、世よある甲斐も
 無き身ぞと、短刀引抜いて逆手よ取り、咽喉をぐさと搔切りて、俯伏す

川氏十八

倒たおるれば鮮血淋漓せんくりょうりとして芝生しばを浸しみし、唯力なき流矢のりやのみ戸尻どじりのほとりほとりより落おちて、近ちかき程ほどのより人も無ひとく、腥風松けいふうまつを吹ふいて寒さむし

川 氏 十 八

八
十
氏
川

八
十
氏
川
終

明治廿六年五月十八日印刷

明治廿六年五月廿二日發行

東京日本橋區通四丁目四番地

我 加 藤 內

東京日本橋區新和泉町壹番地

瀧川三代太郎

東京日本橋區新和泉町壹番地

今古堂活版所

東京日本橋區通四丁目四番地

金 樓 堂

發行者兼
發行刻 翻

印刷者

發兌

